まぶらほ　最強にして最高のメイドの主人

jindam3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まぶらほ　最強にして最高のメイドの主人

【Ｎコード】
Ｎ９３７１Ｔ

【作者名】
ｊｉｎｄａｍ３

【あらすじ】
この小説は式森和樹の性格と強さがかなり違います。
登場人物は式森和樹とＭＭＭのメイド以外出てこないかもしれません。
あと、デュエルメイドのメイドも何人か出てきます（自分が気に入ったメイドだけ）デュエルメイドの性格と言葉遣いが分からないので僕の想像で書きました。
追記（１）もしかしたら、僕が気に入った漫画・アニメその他諸々からもしかしたらメイドが出てくるかも？しれないです。

プロローグ

ある孤島に豪邸がある。
その豪邸はまるで宮殿のように広く美しい。
豪邸の一室のベットに一人の老人が横たわっていた。
???「お呼びでしょうか？」
老人「リーラ」
リーラ「はい・・・」
老人「今日は何日だ？」
リーラ「十七日でございます。」
老人「そうか・・・・もうそろそろだな。
時の流れは早いものだ・・・・・リーラ、もっとそばへ」
リーラは顔を近づけた。同時に、老人の手が、ベッドの中からするりと抜けた。その手は女性の視線と合わないように床を這うようにして彼女の後ろに回された。
老人「お前は優秀なハウスキーパーだ・・・・これまで仕えてくれて、感謝している・・・・・」
リーラ「ありがとうございます」
老人「だが、わしはもう老いた・・・この通り、動く力もない」
言葉とは裏腹に、手はリーラの足に沿って上へ登っていく。
老人「リーラよ、わしは・・・・誓約をしないつもりだ」
リーラ「・・・・なにをおっしゃいます」
声にわずかの感情を込めていった。続きを言おうとするが、遮られた。
老人「必要なのは、この島の後継者だ。そのための人材を捜さねばならん」
リーラ「どなたか、心当たりでも」
老人「それだが・・・・・そこの封筒を開けてくれんか」
リーラは封筒を開けた。中には調査書が入っていた。写真が一枚、

クリップで留めてある。まだ若い、学生らしき少年が写っていた。
リーラはじっと、写真を見つめた。
リーラ「・・・・この方が？」
老人「そうだ、ＭＭＭの東京支部が報せてくれた・・・」
リーラ「そうですか・・・・」
彼女の注意が調査書に向いているすきに、老人の手がまた動き出した。
老人「気に入ったか・・・・」
リーラ「・・・・・・・・・・・・・・」
彼女の視線は、ずっと写真に注がれていた。
手が上がった。いったん止まると、スカートに包まれた魅惑的なヒップに・・・・
達しなかった。リーラが左手を後ろに回し、手首をしっかり押さえたのである。
リーラ「この方が、新しく・・・・私たちの」
調査書を読みながら、細い指に力を込めた。老人の手がみしみしと音を立てている。
老人「あた、あたたた」
リーラ「ご主人様？」
老人「ちょっと力が強くないか？」
リーラ「なにをおっしゃいます。女の細い腕のどこにそんな力があるでしょうか」
言葉とは裏腹にリーラはいっこうに手を離さなかった。ひねり上げ、骨折させるかの勢いであった。
老人「しかし今日はいつもよりも・・・・・痛たたたたた」
リーラ「気のせいでしょう。」
老人の顔に脂汗が浮かぶ。自由な手足を振り回し、
ベッドでじたばたした。リーラは眉一つ動かさなかった。
リーラ「ご主人様、お話の続きでございますが」
老人「う・・・・・うむ。この後継者だが、早急に来てもらわねば

ならん。ＭＭＭの支部によると・・・・こ、こっちへ旅行の予定がある・・・・はずで・・・きっとお前たちにふさわしく・・・・っく、あああ」
リーラ「近日中にいらっしゃるのですね？」
老人「・・・・すぐに、多分すぐ・・・・痛・・・・」
リーラ「では私たちは、これまで通りお仕えいたします。新しいご主人様がいらっしゃるまでには、誓約の準備もおこなっておきますので・・・・・」
老人「それでよい・・・・・リ、リーラ」
リーラ「まだなにか」
老人「た、たのむ・・・、は、はやく離してくれ・・・・・お・・・・折れそうだ」
彼女は左手を軽くひねり、それから指の力を緩めた。ぽきっとかるい音がすると、老人は叫び声をあげ、白目をむいて動かなくなった。
リーラは深々と頭を下げ、静かに退出した。

第一話　遭難と出会い

偶然にも商店街の福引で一等の南国の島への旅行券を獲得した一人の少年がいた。
ちょうど夏休みだったので少年はラッキーと思い旅行の準備をした。
福引で当てた旅行券は一人用で誰も誘えなかった。
旅行当日一人旅も偶にはいいかなと思い空港へ向かい飛行機に乗った。
ある島で飛行機を乗り換えセスナで目的地の島まで向かうだけであった。
ここまでは順調の旅行だった・・・・・そうここまでは・・・・・・・・・？？？「おいおい・・・・今日の俺はラッキーなのかそうじゃないのかよくわからないよ」
セスナで目的の島まで向かうはずだったのだが・・・・・セスナが墜落してしまった。
正確には墜落というより撃墜といった方が正しいのかもしれない。
落ちたセスナの翼を見てみると大きな弾痕があった。
この時少年は思った、これは墜落ではなく撃墜だと。
そしてこの島で何かが起きていると・・・・・
少年の名前は式森和樹高校二年生。
腰に刀をさしているこの少年は見渡す限りのジャングルを警戒しながら彷徨っていた。
和樹「ん？今銃声がしたような・・・・気のせいか？・・・・それにしてもこの島は無人島・・・・じゃないよな・・撃墜されたし・・・・・こっちか・・・・」
自分の直感を信じて進む和樹、草の根や木の枝をかき分けて進むとそこには立派な家があったいや家というより豪邸でもなく美しく大きな城があった。
和樹「なんでこんな島にこんな城が・・・・」

人のいる気配はあるが、姿が見えない、それどころか緊迫した雰囲気すらあった。
巨大な扉の前に立った。呼び鈴代わりの紐があったので引く。
しばらくして、扉が開いた。
中から、メガネを掛けた美人メイドが出てきた。
???「はい、どちらさまですか・・・」
和樹「すみません。えーと・・・なんて言ったらいいのかな・・・道に迷いまして、いや、迷ったというか遭難しまして」
???「・・・・・・・・・?」
彼女は首を傾げたが和樹は続ける。
和樹「実はその、飛行機で旅行中に墜落・・・じゃなくて撃墜されまして・・・」
メイドはなにかに気づいたような顔をした。
???「よかった・・・・・。もう一度、捜索班を出すところでした」
和樹「え?」
???「しばらくお待ちいただけますか?」
奥へ引っ込む。和樹はなんだか理解できないまま、その場にたたずんだ。
メイドはなかなか戻ってこなかった。
???「お待たせしました。申し訳ございません」
眼鏡メイドは頭を下げた。さっきとは別の、銀髪のメイドだ。
リーラ「私はリーラと申します、この屋敷でメイド長をしております。」
和樹「どうも・・・」
リーラ「お疲れでしょうが、主人から、中へお通しするように言われております」
和樹「はあ・・・・」
リーラ「ご案内いたします」
ゆっくりリーラの後に付いていくと扉の前に着いた。

リーラ「式森様、どうぞ中へ」
リーラが扉を大きく開けた。広い部屋の中に入った。椅子に座ろうとして危うくひっくり返りそうになった。そこの中央にしつらえたテーブルに男がいた。欧州貴族の末裔みたいな老人だった。だが和樹がそうなったのはそんなことではない。
壁際に、ずらりと女の子が並んでいるのだ。
和樹「・・・・・・・・」
三、四十人はいるだろうか。背の高さも髪の色もまちまちだが、皆十代後半から二十代前半のようだ。顔立ちの美しい娘たちが、身じろぎもせずに立っていて、和樹のことを待っている。驚くべきことに、全員が紺色の服を着ていた。彼女たちは一人残らず、メイドなのであった。それと和樹はあること気づいた。
老人「いや、よく来てくれた。さあこっちへ」
茫然としている和樹に、老人が言った。最初に出てきた眼鏡のメイドが、椅子をひいてくれた。メイドがなれた手つきで紅茶を注ぐ。
老人にはリーラがついていた。彼はいかにも嬉しそうな表情だった。
老人「この島に男はわししかいなくてね。若い人は大歓迎だ」
和樹「はあ・・・・・・・」
老人「ゆっくりしてくれたまえ。寝室は用意させる」
和樹「どうも・・・・・」
和樹はメイドたちを見渡した。
老人「彼女たちは、この屋敷の使用人でね、わしがこの島に移る前から雇っている者たちがほとんどだ。よく働く、有能なメイドだよ」
和樹「それにしては多くないですか？」
老人「百五十はいるな」
和樹「ひゃ、百・・・・・五十」
老人「わしのメイドたちは少ないほうだぞ。
同士の中には五百人ほど雇っている者もいる。」
和樹「（そんなにメイド雇ってどうすんだよ・・・・メイド王国でも作りたいのか？）」

老人「疑問に思っているみたいだな」
和樹「・・・・そりゃまあ」
老人「若い君は知らないかもしれん。私はＭＭＭの会員なのだよ」
和樹「は？なんですかそれ」
和樹はそんな名前の組織は聞いたことがなかった。
そんな和樹に老人ＭＭＭがどういう組織なのかを説明した。
その後、和樹は遭難したことを話した。
老人「そのことは知っている。実は君の乗機を撃墜したのは、わしたちなのだ」
和樹「はあ？」
紅茶を吹き出しそうになった。
老人「本来なら、到着地の島に船を出して、君を迎えに行くはずだったのだ。ところがこの島は敵に備えて警戒態勢に入っていてな。つい敵機と誤認して射撃をしてしまった。もうしわけなかった。」
つまり和樹はこの島の住人、しかもメイドとその雇い主に打ち落とされてしまったのである。そりゃあ歓迎してくれているはずだ。
和樹「あの・・・俺を迎えてくれるつもりだったんですか？」
老人「そうじゃよ」
和樹「それに敵って・・・・・。戦争でもしてるんですか」
老人「さよう。実はな・・・」
事情を話そうとした矢先にリーラが、耳元でなにか囁いた。
老人「さて・・・これから式森君にこの島で何が起こっているのかを話したかったが、
そうもいかなくなった。急用ができたようだ。明日の朝にでもお目にかかろう。」
和樹「え、朝ですか？」
老人「それと式森君、朝は必ずここにいてもらいたい」
和樹「それは・・・・いいですけど」
老人「夕食は運ばせるよ。食事は豪勢なものを用意させる。楽しみにしてくれたまえ

それではまた明日。」
老人はそう言うと、大勢のメイドと共に退出した。
和樹「（おいおい・・・・気のせいかと思ったら見たことある娘がいたのは
気のせいじゃないな・・・はぁ～～～どうなるだろうこれから・・・）」

第二話　知った顔

和樹は部屋まで連れていかれた。案内したのは、眼鏡をかけたメイドだった。
本来ならリーラが客を案内するのだそうだが、主人である老人の許にいなければならないらしい。かわりとしてこのメイドが案内することになったのである。メイドはエーファと名乗った。
エーファ「こちらの部屋をご利用ください。中の掃除はすんでおります。お食事はすぐに運ばせますので・・・・」
和樹は礼を言うと、部屋に入ろうとする。
エーファ「あっ、待ってください・・・そこには段差がございますので、お気をつけて・・・・きゃあっ！」
和樹は手を伸ばし、彼女の身体を支えた。
和樹「大丈夫か？」
エーファ「す、すみません。わたしって要領悪くて・・・」
和樹「転ぶのは要領じゃないと思うが」
エーファ「本当にすみませんでした。こ、こんなことで式森様の手をわずらわせたと知れたら・・・どうしよう・・・」
彼女の顔がどんどん青くなった。
和樹「そんなに気にすることないって、それより怪我がなくてよかった」
和樹は彼女に向かって微笑む。エーファの顔が赤くなった。
エーファ「本当に申し訳ございませんでした。ではその、これで・・・」
エーファは頭を下げると、足早に去っていった。
和樹はすぐベッドに寝転がり疲れを癒そうとした。
だんだん眠くなり、うとうとしていたら、ノックが聴こえた。
和樹「はいどうぞ」
リーラ「失礼いたします」

リーラが深々と礼をした。
和樹「あ・・・はい？」
リーラ「お食事をお持ちしましたすぐに用意しますので、お座りになってお待ちください」
リーラはカートを押して室内に入った。
豪華な料理だった。スープに始まり、次々と豪華な料理が運ばれる。
フォアグラが出てきたころ、和樹はリーラにたずねた。
和樹「あのさ、リーラってメイド長だろ？」
リーラ「・・・確かに私はメイドたちの長を任せられております」
和樹「城の主人が待ってるんじゃないのか」
彼女は、ちらっと和樹を見た。
リーラ「ですが今は式森様に仕える身。お気遣いは無用です」
和樹「そうなんだ・・・・あのさ、こんなこと言うのもなんだけど、ここの主人、結構な年だろ。万が一なんかおこったら、どうするんだ？」
リーラ「そのことなんですが、明日ご主人様から大事なお話がございます」
それを聞いた和樹はなにかを考える。
リーラ「式森様・・・・」
和樹「え、なに？」
リーラ「早くお召し上がりください。料理が冷めてしまいます」
和樹「ああ、・・それじゃ・・・いただきま・・・・ん？今なにか聞こえなかったか？」
リーラ「いえ、なにも聞こえませんでしたが」
和樹「そう、気のせいか」
しかし、すべての料理を食べ終わったころ、部屋の外がなにやら騒がしくなった。
？？？「ちょっと押さないでください！」
？？？「変なとこ触らないでよ！」
？？？「もう・・・二人ともそんな大きな声を出すとみつか・・・」

ガチャッ　「あ、あー！！」ドタンバターン
リーラが扉をあけると沢山のメイドがいた。
リーラ「お前達！何をやっている！！」
？？？「いや・・・あの～～～その～～」
？？？「式森様のお顔を見たくて」
リーラ「ネリー・・・お前もか」
ネリー「すいません・・・・リーラ様・・・」
リーラ「とにかくお前達はすぐに持ち場に戻「ちょっと待ってくれ」
」
和樹「シェルビーだよな？」
シェルビー「あ、あたしのこと覚えてるの？」
和樹「ああ！久し振りだな・・・前に会ったのは・・・たしか」
シェルビー「四年前だよ和樹・・
それにしてもここで会えるなんて思ってもいなかったよ」
実はこの二人昔は家が近所だったのよく遊んでいた。
しかし、シェルビーは引っ越してしまいそれ以来会っていなのだ。
和樹「そうだな・・・それよりもシェルビーなんか昔と雰囲気が変わったな」
シェルビー「ほ・・・本当！！」
和樹「んん・・・・・なんていうのかその
・・・綺麗な目をするようになったと思ってな、メイドになったことが関係しているのか？」
シェルビー「う・・・・うん」
このあとも和樹とシェルビーは他愛のない世間話をした。
扉の前にいたメイドたちは「仕事がありますので」と言い、部屋を出ていった。
リーラとシェルビーも仕事場へ向かう。リーラは少し機嫌が悪かった。
リーラ「シェルビー」
シェルビー「は、はい」

リーラ「私は知らなかったぞ。式森様とお前にあんな関係があったなんてな」
シェルビー「あの・・・・その・・・・なんといいますか・・・・」
リーラは顔を真赤にしたシェルビーを睨んだ。

第三話　二人のメイド

それから一時間後。
メイド達が去った後、和樹は暇を持て余していた。
和樹「この島でまさかシェルビーに会えるとは思ってもいなかったな。」
改めて旧友に会えたことを懐かしんでいた和樹だったが。
???「ね～～～やっぱりやめようよ～～～」
???「何言ってるの！せっかくここまで来たのに貴女は和樹さんに会いたくないの？」
???「う～～～～～～そう言われると会いたい・・・和樹さんに・・・」
???「それじゃ決まり・・・・じゃ行こ・・・・・」
ガチャ
聞き覚えのある声がしたので扉を開ける和樹。
和樹の思った通り見覚えのある娘が二人いた。
ピンク色の髪をしたツインテールの娘と髪の色が茶色のポニーテールの娘がいた。
???「「あ・・・・・・・」」
心の準備がまだできていない状態で和樹と対面した二人。
和樹「・・・・直接会うのは二年ぶりだな、ベルリネッタ・エスカレード」
ベルリネッタ「えっ！私達の事。」
エスカレード「覚えているんですか！」
和樹「当たり前だろ、俺の大事なメル友なんだからな・・・
そうかあれから二年もたつのか。」
和樹とベルリネッタ・エスカレードが最初に出会ったのは和樹が中学二年生の時に東京へ修学旅行に行った時のことだ。修学旅行の自由時間の時に和樹の班のうちの何人か秋葉原へ行きたいと言ったの

で秋葉原へ向かった。班の連中は思い思い秋葉原を楽しんでいたが
和樹はついていけずこっそり班を抜け出し町中をぶらぶらしていた。
そんなとき、不良五人に絡まれていた女の子が二人いたのを偶然見
てしまった和樹は不良五人をぶっ飛ばし女の子二人を助けた。
この女の子二人が和樹の目の前にいるメイド、ベルリネッタ・エス
カレードである。
和樹に助けられた二人は和樹にお礼として和樹に自分たちのメール
アドレスを教えた。
『何か困ったことや悩み事があったらいつでも私たちにメールして
ください』
と言われ彼女たちのメールアドレスを受け取った和樹。
それ以来、三人は二年間ずっとメールでやり取りをしている。
和樹「（それにしてもシェルビーにしてもそうだったけど女の子っ
てしばらく見ない間に雰囲気が変わるものなのか？）」
ベルリネッタ「？？？？和樹さんどうかしました？」
和樹「二人とも昔と比べて感じが変わったと思ってな」
二人「「ほ・・・・本当ですか！」」
和樹「ああ・・・ベルリネッタは昔と比べておどおどした感じがな
くなっているし
エスカレードは身にまとっている雰囲気が変わってるしな。」
ベルリネッタ「あ・・・ありがとうございます！（やった！！和樹
さんに褒められたよ！！！）」
エスカレード「ありがとうございます！
（ああ～～和樹さん昔と一緒で優しいな・・・そんな和樹さんだか
ら私は・・・・）」
和樹に褒められて有頂天になっているベルリネッタとエスカレード。
そのあと三人はシェルビーの時と同じく他愛のない世間話をした。
コンコン
リーラ「失礼します。式森様こちらに・・・・」
ベルリネッタ・エスカレード「「あっ」」

リーラ「お前たちここで何をしている！！」
ベルリネッタ・エスカレード「「いや・・・あの・・その・・・」」
リーラ「さっさと仕事場に戻れ！！！！」
ベルリネッタ・エスカレード「「は・・・はい！・・・・失礼しました！！」
リーラに怒られ急いで部屋を出る二人。
リーラ「式森様・・・たびたび申し訳ございません」
和樹「いいよそんなに気にすることないって
・・・それに久しぶりに二人に会えて俺も嬉しかったしな。」
リーラ「・・・・そうですか・・・・所で式森様」
和樹「ん？」
リーラ「・・・いえなんでもありません・・・失礼します」
先ほどとは打って変わって静かに部屋を退出するリーラ。
この時リーラは和樹にベルリネッタとエスカレードの事を聞こうとした。
しかし、そんな事を聞くのはメイドとしてどうなのだろうと思ってしまった
完璧メイドリーラ

第四話　異変と爆音

あれからしばらくして和樹がベットに横たわっていると・・・・・・
ドカーン！！バコーン！！！
和樹「なにかあったのか？」
爆発に振動が起こったのでベットから起きる和樹
コンコンコン
ノックする音がした。返事する間もなく。
扉が勝手に開いた。気の強そうなメイドが一人、立っていた。
???「あー、式森っている？」
和樹「俺だけど？」
???「・・・・・・へえ、あんたがそうかい・・・結構かわいい顔してるな」
和樹「・・・え？」
???「ご主人様がね、客が不安だろうから安心させろって」
和樹「さっきの爆発のこと？」
???「そう。結構浸透されたけど退治したから。もうなにも起こんないよ」
和樹「退治・・・化け物でもいるのか？」
???「ん～～～～そんなもんかな」
彼女は断りもせず部屋の中に入った。椅子を見つけ、腰をおろし、ポケットからタバコを取り出し、ライターで火をつけた。
そしてお菓子が入っていた皿を引き寄せ、ガラス皿に灰を落とした。
???「あー、ごめんごめん、ちょっと休憩させてくんない？」
彼女は天井にむけて、煙を豪快に吐いた。
???「最近仕事がきついんだよ。家事以外に訓練が二時間も延ばされてさー。あいつもなにはりきってんのかね。今までより生き生きしてやがる」
和樹「ちょっといいか？」

夕菜が空咳をしながら言った。
和樹「お前は一体・・・」
???「んー?見ての通りメイド」
和樹「いや・・・そうじゃなくて・・・・」
セレン「名前ならセレンってのがあるけど」
和樹「セレン、何か用があったんじゃないのか」
セレン「さっき言ったろ。安心しろって伝えにきたの」
セレンはさっきの出来事の間、自分が何をしていたかを話した。
話によるとここのメイド達はさっきまで何かと戦っていたらしい。
和樹「メイドなのに戦闘なんかしてんの?」
セレン「私は傭兵みたいなもんだから例外だけど、
普通のメイドでも武器ぐらいは使えるぜ」
和樹「そういうもんなのか」
セレン「当然だろ。おまけにメイドの長になったら将校課程だぜ。
銃器の一つも扱えないようじゃあ、示しがつかない」
和樹「じゃあリーラも・・」
セレン「ああ。あいつはここのボスだから。主人の世話はもちろん、
なんだってできるぜ。サイボーグみてーな女だ」
セレンは肩をすくめた。
セレン「あの老人がこれだけの土地を維持できんのもあいつのおかげだ。資産と会社は全部あいつが仕切ってる。しかも減らずに増え続けてるんだ。メイド趣味の親父だけでなく、ちょっとした資産家ならどれだけ金を払っても雇っておきたい女だな」
和樹「確かにそれはすごいな。」
セレン「まあ、リーラも一から十まで完璧じゃないさ。
ちょっと思い込みが激しいのが欠点だな」
和樹「そうは見えないけどな・・・」
セレン「ときどき冷静じゃなくなるんだよ・・・あんたが墜落したって聞いたとき、自分で捜索隊を指揮するって言いだしたんだ。ちょっとやりすぎだな。リーラの奴何をそんなに張り切ってるのかが

不思議だったんだが・・・・」
セレンは消えたタバコで、和樹を指した。
セレン「もしかしたら、あんたのこと気に入ってんのかもな」
和樹「俺か！？でもリーラのことは知らなかったし、墜落するまでメイドにはあまり縁はなかったぜ」
セレン「あんたはそうだろうけどリーラは違う」
和樹「なんでだ？」
セレンは答えず、和樹の顔を覗き込んだ。
セレン「へぇ～～～結構いい男じゃん、こりゃリーラにはもったいないかも。
リーラが仕えたがるのも分かる気がするな。他のメイドたちにも人気があったぜ」
和樹「そうか？・・・俺はよくわからんが・・・・」
セレンは元の椅子に座る。またタバコを取り出した。
セレン「あいつ、生まれながらのメイドだからな、人の世話をするのが好きなんだ。
ちょっと弱みを見せたら死ぬまでお仕えしますとか言うぜ。
面倒見のいい女房みたいなもんだよ」
コンコン
リーラ「式森様たびたびすいません・・・・こちらに・・・セレン何をしている。」
セレン「あたしは爺さんに客を安心させろと言われて来ただけだよ。」
リーラ「本当にそれだけか・・・・」
セレン「まぁ～～～な・・・」
リーラ「よし持ち場に戻れ。」
セレン「あいよ～～～～」
けだるそうな声で部屋を出ていった。
メイドにもいろいろの奴がいるんだなと思った。
リーラ「式森様・・・まことに申し訳ございません！！

三度も式森様にご迷惑をおかけしまして」
和樹「え？」
ものすごい勢いで謝るリーラに思わずたじろいでしまう。
リーラ「部下の不祥事は私の不祥事。これからは精一杯
尽くさせていただきますので、なにとぞお許しください。」
和樹「え～～と別にいやな事があったわけじゃないしそんなに気に
することは・・・」
リーラ「いいえ、これも私が最後まで式森様に最後までお仕えして
いなかったためです。
これからはお側にいさせていただきます。夕食の時から常に控えて
いれば、
このようにご不快な思いをさせずにすみましたものを。」
リーラは、和樹の身を案じている態度で和樹に近寄った。
リーラ「これからは何でもおっしゃってください。
式森様に快適に過ごしていただくのが、私達メイドの勤め。
全身全霊を捧げ、お仕えする所存です。」
鬼気迫る勢いで迫るリーラに和樹は・・・・
和樹「リーラ落ち着けって」
リーラ「し、失礼しました。」
押しつけがましい事をしたと思いゆっくり下がる。
和樹「・・・・ふぁ～～～～～少し眠くなってきたな。」
リーラ「そうですか・・・・それでは私はこれで失礼させていただ
きます。」
和樹「ああそれじゃーおやすみリーラ。」
リーラ「おやすみなさいませ式森様。」
眠りを妨げないように部屋を出ようとしたが、
何かをお思いだしたかのように和樹の方を振り向く。
リーラ「・・・式森様」
和樹「ん・・・どうした。」
リーラ「主人も申しておりましたが、明日は主人から大事なお話が

あります。
朝食は必ずお取りになるようお願いします。」
和樹「ああ分かった。」
リーラ「では、おやすみなさいませ。」
意味深の言葉を残しゆっくりと退出していく。
和樹「（それにしても今日はいろいろあったな
・・・・四年ぶりにシェルビーにも合うし今までメールでしかやり
取りをしていなかった
ベルリネッタとエスカレードにも合うし・・・
まったく今の世の中どうなるかわかったもんじゃないな・・・・・・
・おやすみ）」

第五話　誓約

朝食は、はじめて老人と対面した、あの部屋で食べることになった。
テーブルには食事の準備が整っていた。
和樹の席にはリーラとエーファがついてくれた。
昨日みたいに、壁際にメイドがびっしり揃ったりはしていなかった。
それでも他に十人ほどいた。
食事は滞りなく進み、お茶となった。
老人「リラックスできたかね」
和樹「まぁ・・・ぼちぼち・・・・それより昨日言っていた敵とは何者なんですか？」
老人は話し出した。敵はＭＭＭの宿敵であること。名前はマーキュリーブリケード（水銀旅団）。パジャマをこよなく愛す、この世界では有名なテロ組織らしく、以前から争ってきたらしい。この島に移ってからは戦闘も減っていたらしいが、彼らが最近この島に上陸したらしい。この後、老人はコスチューム愛好家が作った組織の戦いの歴史について話し出した。水銀旅団はそのなかでもかなり過激な組織らしい。なんでも、メイドを憎んでおり、メイドを捕まえては、彼女らの耳に水銀を入れるらしい。老人は、水銀旅団を倒さないかぎり、メイドに明日はないといった。
それで、ここ数日戦っているらしい。
老人のの話によると、秘密が漏れたらしい。その秘密とは誓約日と呼ばれるものであった。
メイドたちには年に一回、誓約によって主人に忠誠を誓うことになっているらしい。
その儀式がこの島で行われるとのことだ。
和樹「あの、そのことなんですけど、その儀式一体どうするんですか？
失礼かもしれませんがもう結構な年でしょう。彼女たちはどうする

んですか？」
老人「そのことなんだが、確かにわしもこの通り年だ。それで後継者を探していた」
和樹「へ～～～～そうなんですか」
とりあえず返事をしたが、和樹には老人の言おうとしてることが分かっていた。
和樹「ん？・・・・・それってもしかして」
老人「そう。式森和樹君。君のことだ」
和樹「・・・・・・・え」
この時和樹の時が一瞬とまった。
和樹「あの、それどうしてもならなきゃいけないんでしょうか？」
老人「いやなのか？」
和樹「そういうわけじゃなくて・・・・
いきなりそんな話をされてもピンとこないんですけど。」
老人「ん～～～確かに君の言うことも一理あるな・・・・・
ならば明日の朝まで考える時間をあげるから
明日の朝この時間に答えを聞かせてくれないか。」
和樹「・・・・明日ですか・・・・・・明日！！！！？？？？」
絶叫が部屋に響く。
老人「本来ならもう少し君に時間をあげたいのだが・・・・・
時間がなくてね・・・君には申訳ないが。」

和樹「・・・そう言うことなら・・・・解りました。」
それから和樹はリーラに案内され用意された部屋に戻った。
ベットの上に腰を下ろし。
鞘から刀を抜いて刀を見ているわけではなく・・・・刀に映る自分を見ていた。
和樹は悩み事があったり困ったことあるとこういった行動に出る癖がある。

和樹「はぁ～～～～なんでこんなことになったんだ？
メイドだらけの島に不時着したと思ったら
今度はそのメイド達の主人になってくれって・・・・」
そんな事を考えていると。
コンコン
シェルビー「あたしだけど入っていいかな？」
和樹「ああ・・・いいよ。」
シェルビーが入ってくる前に急いで刀を鞘に戻す。
和樹の了解を得て部屋に入り和樹の前に立つ。
シェルビー「・・・・ねぇ・・・・和樹。」
和樹「ん？」
シェルビー「あの・・・その・・・・・・やっぱり・・・その・・・
悩んでる？」
和樹「さっきの話のことか・・・・」
シェルビー「う・・・・うん」
和樹「まぁ～～～いきなりあんなこと言われても
俺にはどうしていいかわかんね～よ・・・」
沈黙が部屋を支配する。
そんな中、意を決したシェルビーが口を開く。
シェルビー「あたし・・・・和樹に聞いてほしいことがあって。」
和樹「聞いてほしいこと？」
シェルビー「・・・・和樹はなんで私がメイドになったと思う？」
和樹「・・・・・・なんでだ？」
シェルビー「あたしね四年前和樹と別れた後
何をやってもうまくいかなかったの。」
驚いた顔で話を聞く和樹。
そう思うのも無理はなかった。
和樹の知っているシェルビーはこんな悲しい顔をしないから・・・
シェルビー「その時思ったの・・・あたしには和樹がいないと駄目
なんだって

だからあたしはメイドになろうと思ったの」
和樹「ちょっと待てよ。それとシェルビーがメイドになるのとどう関係があるんだ」
シェルビー「はぁ～～～～ここまで言ってもわかんないかな・・・・・」
和樹「ご・・・ごめん」
シェルビー「あたしはね和樹の傍にいたくてメイドになったの！」
和樹「へ～～～～～ん？？？・・・・・・はぁ！！！！？？？？」
まさかのシェルビーの告白に本日二度目の絶叫が部屋に響く。
そんな和樹を無視してシェルビーは正面から和樹に抱きつく。
シェルビー「だから・・・お願い和樹・・・あたしのご主人様になって・・・
どんなことがあってもあたしが和樹を守るから！！」
和樹「シェ・・・・・シェルビー」
思わず背中に手を回そうとしたができなかった。
なぜなら、今の自分にそんな資格はないと思ってしまう。
シェルビー「・・・・あ・・・ご・・・ごめんね・・・和樹
こんなおしつけがましいこと・・・・言って」
和樹「いや・・・そんなことは・・・・」
シェルビー「それじゃぁ・・・・和樹また明日」
目に涙を貯めた顔で部屋を出ていくシェルビー。
和樹「はぁ～～～なにをやっているんだ俺は・・・・
シェルビーにあんな顔をさせるなんて・・・・・自分が情けない・・・・」
勢いよくベットに寝転がり枕に顔を埋める。

第六話　伝える思い

和樹はさらに悩んでいた。
シェルビーが和樹に衝撃の告白をして三十分後。
ベルリネッタが部屋に来た。
シェルビーの時と同じくベルリネッタも和樹に主人になってほしくて部屋にきて和樹にその思いを伝えた。
それからさらに三十分後今度はエスカレードが部屋にやってきた。
内容はベルリネッタとシェルビーの時と同じで和樹に思いを伝えにきた。
ちなみにこの二人が和樹に何て言ったのかというと・・・・

ベルリネッタの場合
ベルリネッタ「和樹さん・・・・私あの時和樹さんに助けていただいた時・・・
和樹さんの背中を見て思ったんです。和樹さんの大きな背中を守れる一人前のメイドになったら和樹さんのメイドになろうと決めたんです！！
だからお願いします和樹さん！！
この大剣に懸けて必ず和樹さんをお守りいたします！！
だから私のご主人様になってください！！！」
会ったときから気なっていた大剣ガーディアンソードを掲げ和樹に思いを告げる。
その姿は和樹が出会った頃のオドオドした彼女とは思えないほど凛々しい姿だった。

エスカレードの場合

エスカレード「私の家は代々騎士の家系なのは和樹さんにメールで教えましたよね。
和樹さんに出会う前の私はただ単に家の言う通りに何となくメイドの仕事をしていました。
今だから言える事ですけどあの時の私は本当につまらない人間でした。
ですが・・・あの時和樹さんに出会い。
助けていただいた時の和樹さんを見て思ったんです。この人のメイドになりたいと・・・
その時私は初めて目標を持つことができたんです。
それからの私は和樹さんのメイドになるために必死に死に物狂いでメイドの修行に励みました。・・・・和樹さんは私にとってたった一人のご主人様になってほしいと思った方なんです！！お願いします！！！和樹さん私のこの世でたった一人のご主人様になってくださいお願いします！！！」
必死になって和樹に思いを伝えるエスカレード。
ちなみに、なぜ騎士の家系のエスカレードがなぜメイドをしているのかというと・・・・
男は騎士女はメイドになるという古くからの伝統があるらしい。

そして現在
和樹は部屋で再び刀に映る自分の姿を見ていた。
今自分がどういう眼をしているのか。今自分はどうするべきなのか。
そんなことを考えていた。
和樹「まさかあの二人まで俺にご主人様になってくれって
言われるなんて予想外だったな・・・・マジで俺はどうするべきなんだろうか？」
コンコン
和樹「（？？？今度は誰だ？）」

リーラ「式森様ご昼食をお持ちいたしました。」
部屋にある時計を見ると指針が十二時を指していた。
リーラの脇にある。豪華な料理が乗っているトレーを押して部屋に入る
リーラ「すぐにご用意いたします。お座りになってお待ちください。」
素早くそして丁寧に料理をテーブルに並べる。
昼食も昨日の夕食に負けず劣らず豪華なものだった。
和樹「昨日の夜も思ったんだけど美味そうだな・・・・いただきます。」
手をあわせ食事のあいさつをすると料理に手を出す。
それからしばらくして、すべての料理を食べ終える和樹。
和樹「ふぅ～～～～～きょうの料理も美味かったよ。」
リーラ「コックにそう伝えておきます。きっと喜ぶでしょう。」
自分が褒められたかのように嬉しい声を出す。
和樹が食べ終えた食器をトレーに乗せる。
和樹「（一応リーラにも聞いてみるか）・・・・なぁ・・・・リーラ」
リーラ「はい、なんでしょうか？」
作業の手を止め和樹の顔を見る。
和樹「・・・・リーラも俺にお前たちのご主人様になって欲しいのか？」
リーラ「はい、もちろんでございます。」
迷いのない目ではっきり言うリーラ。
だからこそ余計和樹は分らなくなってしまった。
どうして、彼女たちは自分にご主人様をやってほしいのかが・・・・・
和樹「こんなことを言うのもなんだけど
俺達出会ってからまだそんなに日もたっていないだろ、なのにどうしてなんだ。」
リーラ「式森様・・・私はメイドとして数多くの方に仕えてきました。

しかし、それはあくまでも仕事としてメイドの職務を忠実にこなしていただけです。
そこには一切の感情もなくただ機械的に職務を全うしていただけでした。
しかし、一週間前私は今のご主人様から式森様の調査書を見せていただきました。
調査書を見た私は胸の高鳴りを抑えることが出ませんでした。
そして、昨日初めて式森様のお顔を拝見した時、
私は初めて本気でこの方に尽くしたいと思ったのです。」
和樹「・・・・・・・」
リーラ「式森様・・・・私の言葉が信用できませんか・・・・・」
悲しげな声で言うリーラに和樹はつい・・・・・・
和樹「いや!!そんなことはない!!」
リーラ「し・・・式森様・・・・・」
和樹の声に少々驚いてしまうリーラ。
そして、和樹も驚いていた。
思わず感情的になってしまったことに。
和樹「リーラ・・・・俺は・・・・・」
ビービービー
自分が思ったことを伝えようとしたが。
リーラが腕に巻いている腕時計からの音によって遮れれてしまう。
よく見ると腕時計が赤く点滅していた。
それを見たリーラは先ほどの優しい表情とは打って変わって戦士の顔なっていた。
リーラ「申し訳ございません。司令室からの呼び出しです。何かあったようです。」
和樹「そ・・・そうか・・・」
リーラ「・・・・式森様先ほどのお話はまた後ほど・・・失礼いたします。」
他人から見れば分からないが名残惜しそうに部屋を去っていく。

第七話　守護するということの意味

司令室でリーラが受けた報告は水銀旅団がこの城に
全軍で攻めに来ているというものであった。
昨日の昼に各地で活動をしている水銀旅団の部隊がこの島に集結。
これにより、兵力差は五倍になってしまった。
圧倒的な数で一気に自らの欲望を満たすのが水銀旅団の魂胆らしい。
その報告を聞いたリーラが隊長のメイド部隊。
第五装甲猟兵侍女中隊（だいごパンツアーイエガーメートヒエンカンパニー）の全戦力を使って撃退することを決める。
この後、リーラは和樹の部屋に行き和樹に『この城にいてください』と伝える。
それから、二時間後、城の中庭に重火器や自分の使いやすい武器で武装したメイド達が整列していた。その中には当然ベルリネッタ・シェルビー・エスカレードもいた。
ベルリネッタは主を守る最強の大剣ガーディアンソードを持ち。
シェルビーは機械式大太刀を持ち。
エスカレードは左手にハンドガン右手にランスを持っていた。
そして、リーラが中庭に用意させた壇上に上がり出撃の命令を下す。
その光景を和樹は城の中から見ていた。
和樹「俺は何をやっているんだ・・・・・
あいつらがこれから戦おうって時に・・・・・・俺は・・・・・」
和樹がいまだに悩んでいたときに・・・・・・
ドカ――――――ン！！！！
和樹「な、なんだ！！」
リーラ達が向かった方向から爆発がした。
おそらく戦闘が始まったのだろう。
和樹は眼を閉じ思い浮かべた。
自分に思いを伝えに来たメイド達の事を・・・・・・

メイド達の優しさと温もりを・・・・・・・
そしてこの時和樹は・・・・決断する。
和樹「あいつらの思いに応えるためにも・・・・・俺は・・・・・」
ようやく迷いが晴れる。
壁に立てらせていた刀を腰にさし和樹は戦場へ向う。
大切な人達を守るために・・・・・・・・

戦闘開始から二時間。
状況はメイド達の方が不利であった。
いつもの水銀旅団は人ことで言うなら欲望に忠実な集団である。
水銀旅団の大半・・・
ほとんどは綺麗な女の子やかわいい女の子の写真を撮るために集まった集団なのである。写真を撮りまくり羞恥心を高め戦闘不能のするのが水銀旅団の上等手段だ。
だから、目的のためならどんなえげつない子ことでも平気で行うし、兵士一人一人の回復の早さも尋常ではない。しかも、水銀旅団は昨日の援軍が到着したことによっていつもより士気が上がっている。
このことはリーラもある程度覚悟していたのだがここまでとは思ってもいなかった。
そして、戦場では・・・・・
リーラ「まさか水銀旅団の士気がここまで高いとは・・・・・ネリー！！！」
ネリー「は、はい！！」
リーラ「お前は部隊を率いてシェルビーの援護に向かえ
あそこを落とされるとまずいからな」
ネリー「りょ・・・了解しました！！」
リーラ「エスカレード！！！」
エスカレード「はい！！」
リーラ「ここの守りはいいからお前は第一次防衛線で奮戦している

ベルリネッタの支援に向かえ。」
エスカレード「しかし・・・そうするとここの守りが手薄になりますが。」
リーラ「ここの守りは私がするから早く行け！」
エスカレード「わかりました！！」
隊長クラスのメイドに次々と指示を出す。
その指示はどれも正確で非の打ちどころのないものであったが・・・・
・
エーファ「リーラ様！」
リーラ「どうした！！」
エーファ「水銀旅団が第一次防衛線を突破しそうです！！」
リーラ「！！？？そうか・・・・・全部隊に通達第二次防衛線まで後退せよと伝えろ」
エーファ「は・・・・はい！！！」
戦況はかなりまずい。
異常な回復力に続いて水銀旅団は厄介のものを装備していた。
それは、スタンバトンと呼ばれるものであった。
スタンバトン長さはバットと同じくらいのバトンで触れた相手に電流を流すことができるものでスタンバトンを使って電流を流しメイドを気絶させその隙にやりたい放題写真を撮ろうというのが今回の水銀旅団の戦法だ。
幸いにも、スタンバトンによって気絶させられたメイドは何人か出たが写真を取られる前に救出することに成功している。しかし、それによる恐怖で一部の部隊では士気が下がっているのが現状であった。

一方そのころ、第一次防衛線では・・・・
エスカレード「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」　ブン！！ブン！！！
水銀旅団の兵達「うわぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

大剣で次々と敵を蹴散らすベルリネッタだったが。
エスカレード「はぁ・・はぁ・・はぁ・・・き・・・・きりがない・・でも私は負けない！！和樹さんのためにも！！！」
力を振り絞って戦うベルリネッタ。
ブン！！！ブン！！ブン！！！！
水銀旅団の兵達「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
だが・・・・・・
水銀旅団兵Ａ「もらった！！！！」
一瞬の隙を見つけた水銀旅団兵が後ろからベルリネッタに襲い掛かる。
ベルリネッタ「きゃぁぁぁぁ！！！」
水銀旅団兵士Ａ「げふっ！！」
とっさに回し蹴り後ろで襲いかかってきた兵士を倒す。
スタンバトンがベルリネッタの右肩に当たってしまう。
気絶することだけは免れたが右腕がしびれて大剣を握ることができない。
これを好機と見たのか、前方にいた水銀旅団兵達が一斉に襲い掛かる。
ベルリネッタ「（和樹さん！！・・・ごめんなさい！！！わたし・・わたし・・・和樹さんのお役に立てませんでした。）」
思わず目を閉じ、自らの非力さをここにはいない和樹に詫びるベルリネッタだったが。
バキッ！！ドカッ！！バキッ！！バキッ！！
いつまでたっても何もないことに疑問を感じ恐る恐る眼をあけるとそこには・・・・
和樹「お前ら、よってたかって一人の女の子を攻撃するとは、どういう神経しているんだ。」
そこには、ベルリネッタに襲いかかろうとした水銀旅団兵達を殴り飛ばした和樹がいた。
突然の和樹の出現に驚く水銀旅団。

第八話　主として・・男として

ベルリネッタを守るように水銀旅団と対峙する和樹。
その光景を後方で見ていたリーラは・・・
リーラ「し・・・式森様！！？？なぜあのような所に！！！」
水銀旅団の前に立っている和樹を助ける目に急いで和樹のもとへ向かう。
しかし、リーラは知らない和樹の強さを・・・・・

リーラの命令で第一防衛線に来ていたエスカレードも驚いていた。
エスカレード「和樹さん！！どうしてここに・・・・・べ・・・・べルリネッタ！！？？」
右肩を抑えてうずくまっているベルリネッタに駆け寄る。
エスカレード「ベルリネッタ！！大丈夫！！！！」
ベルリネッタ「う・・うんわたしは大丈夫・・・・でも」
ちらりと和樹の方を見る。
その視線に気がつきベルリネッタの方を見る。
和樹「ベルリネッタ・・・・けg「ごめんなさい」え・・・・・」
ベルリネッタ「和樹さんの事を守るって言ったのに・・・・わたしは・・・・
わたしは今もこうやって和樹さんに助けてもらっている・・・
・・わたし・・わたし・・・自分が情けないです・・・・・自分の弱さが恨めしいです」
エスカレードに支えられ泣きながら和樹に謝る。
和樹「そんなことねぇよ」
ベルリネッタ「え？・・・和樹さん？」
和樹「ベルリネッタは弱くなんかねぇよ・・・・それはおれが一番よく知っている。」

ベルリネッタ「で・・・でも！！！」
和樹「さっき自分の弱さが恨めしいと言ったな・・・・それでいいんだよ。
強さっていうのは自分の弱さを知って初めて手にすることができるものなんだよ。
弱さを知っているベルリネッタは強いそれは間違いない！
俺が保証する。それとも、俺の保証じゃあ心もとないか？」
ベルリネッタ「そ・・そんなことありません！！
私は誰よりも和樹さんのことを信じています！！！」
和樹の言葉でさっきまでの胸の中の不安が嘘の様になくなっていた。
和樹「それに・・・・・・」
ベルリネッタ・エスカレード「「それに？？」」
和樹「これから俺に仕えてくれるお前らを守るのも俺の役目だしな。」
ベルリネッタ「え・・・和樹さんそれって」
エスカレード「一体どういう・・・・・」

先ほどの言葉の真意を聞こうとするが。
水銀旅団兵A「おい！貴様我々の邪魔をするとは一体どういう了見だ！！」
水銀旅団兵B「そうだ！！そうだ！！」
水銀旅団兵C「後もう少しで金になる写真が撮れたのに！！」
水銀旅団兵D「よくも俺達のお楽しみの邪魔をしてくれたな！！！」
罵声を浴び再び水銀旅団の方を振り向く。
和樹「（・・・・一人一人相手にしてたらキリがないな・・・
よし・・・あの手で行くか）・・・おい・・・」
怒気を込めた声を出す。
その声に少し驚いた水銀旅団の面々は思わず後ずさんでしまう。
和樹「お前らの事情や楽しみとかそんなの俺の知ったことじゃねん

だよ。
ただ・・・俺のメイド達を傷つける奴はどんな理由があっても俺は許さない！！！
なぜなら、俺が第五装甲猟兵侍女中隊の主だからな！！！！！」
リーラ「し・・・・式森様！！？？？」
和樹の事が心配で急いで第一次防衛線まできたリーラ。
今、和樹のもとへ到着しさっきの言葉を全部聞いていた。
人前では滅多に表情を崩さないリーラだが今回ばかりは目が潤んでいた。
これは嬉さから来るうれし涙。和樹が自分たちのご主人様になってくれる。
そう思うとうれしくて仕方がなかった。
ここが戦場にもかかわらずリーラは和樹に頭を下げる。
『自分たちのご主人様になってくれてありがとうございます』という意味を込めて。
和樹「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
全身に気を張り巡らせる。
水銀旅団兵E「あんなのはただのはったりだ！！！」
敵の隊長らしき男の言葉で水銀旅団の面々ははっとなり。
武器を構え和樹に向かっていくが・・・・・・
和樹「・・・・・失せろ・・・・・」
腹の底から冷えた声を出した。
和樹「おい、もう一度だけ言ってやる・・・とっと・・・・・失せろ！！！！！！！」
大きな怒声を上げ刀を鞘に納めている状態の刀の剣先で地面を思いっきり突く。
どかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！！！！
それによりまるで隕石が落ちたかのように地面が陥没する。
水銀旅団兵E「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
水銀旅団兵F「こ・・こわいよ！！！！！」

水銀旅団兵G「あ・・・あんなのに勝てるわけね～～～よ！！！！」
数では明らかに水銀旅団の方が上。
いくら頭数をそろえても目の前の男には勝てないと彼らの本能が言っていた。
さっきまで偉そうに命令していた隊長が我先に逃げたすと他の兵たちも敗走を始める。
さっきまでは水銀旅団の兵が沢山いたのに。
今、和樹の前にはほとんどいない。
???「お・・・・お前達な・・・・何をしている！！！」
見るからに司令官らしい恰好をしている。
口ヒゲを蓄えたスマートな男が兵に命令するが兵は逃げる一方。
和樹「あいつが水銀旅団の指揮官か・・・よし。」
目にもとまらぬ速さで敵の指揮官の正面に立ち。
腰にさしてある刀を居合いの要領で抜き刀の剣先を首に突き付ける。
和樹「お前が指揮官か？」
迫力のある声で聞く。
この時点で・・至近距離で和樹の眼光に睨みつけられた時点で戦意を喪失している。
???「は・・・・はい！！た・・太平洋・・ほ・・方面し・・・指揮官・・・カ・・・カーボン卿と言います・・」
和樹「そうか・・・・カーボン卿」
カーボン卿「は・・・・はい」
和樹「今後一切この島・・・・いや・・・
俺のメイド達に危害を加えないのなら命までは取らない。」
カーボン卿「ほ・・・本当ですか！！」
和樹「ああ俺は嘘は吐かない・・・・ただし。」
カーボン卿「ただし？」
和樹「もし、今度俺のメイド達に危害を加えたら
今度は容赦なく俺が徹底的に叩き潰す！！！！分かったか！！！！！！」

抑えていた殺気をカーボン卿に叩きつける。
カーボン卿「は・・・・はい！！！！わ・・・・分かりました！！！」
首に突き付けていた刀の剣先を放すと足がガクガクに震えながら逃げ出す。
カーボン卿が和樹の視界に入らなくなるとものすごい数の船のエンジン音がした。
水銀旅団がこの島から引き上げたのだ。

リーラ「式森様」
後ろを振り向くとそこにはほのかに顔の赤い顔をしたリーラがいた。
リーラ「式森様・・・あの・・・
先ほど私達の前で言われたことは本当ですか？
本当に私達のご主人様になってくれるのですか？」
和樹「正直言って俺にはメイドの主人ってのはどういうもんかはわかんねぇが・・・・
リーラ達の思いや気持ちはおれの心に響いたからな。」
リーラ「！！？？し・・・・式森様・・・」
和樹の言葉に思わず涙が出そうになるのをグッとこらえる。
涙が出そうになったのはリーラだけではなく。
ベルリネッタ・エスカレード・シェルビーといった面々も涙をこらえていた。
いつの間にかほかのメイド達もリーラの後ろに整列していた。
リーラ「私達、第五装甲猟兵侍女中隊は式森和樹様をご主人様と仰ぎ。
全身全霊をもってお仕えさせていただく所存でございます！！！」
第五装甲猟兵侍女中隊「「「「「「「「「ご主人様！！！！！
精神誠意お仕えさせていただきます！！！！！」」」」」」」」
１５０人ぐらいはいるメイド達が一斉に頭を下げる。

誓約の場ではなく戦場で第五装甲猟兵侍女中隊と誓約した。
こうして、第五装甲猟兵侍女中隊のご主人様になった和樹。
これから、どのようなことが待ち受けているのか・・・・
それは誰にも分からない

番外編？メイドだ！水着だ！戦争だ？

水銀旅団との戦いの後和樹は老人に自分の決意を伝えた。
老人は大いに喜び『第五装甲猟兵侍女中隊をよろしく頼む』と言われた。
それから三日後。
和樹は本来楽しむはずの南の島のバカンスをこの島で満喫していた。
周りで起こったことがようやく終わり。
改めてこの島を見てみると中々綺麗な島で海がすごく綺麗だ。
実は和樹が世話になっている城の裏にビーチがありそこに和樹はいた。
和樹「ふぅ～～～～～～～～最高～～～～～～～」
海で一時間ほど泳いだ和樹はビーチに備え付けられている。
ビーチパラソルの下のサマーベットの上に横になっていた。
ベルリネッタ「和樹さ・・・じゃなかった
・・・ご主人様お飲物をお持ちいたしました」
近くのテーブルにジュースを置く。
和樹「おっ・・・ありがとな・・・・」
ベルリネッタの方を見ると彼女はいつものピンクのメイド服じゃなく。
ピンクのビキニの水着を身に付けていた。
メイド服の時もそうだがベルリネッタはスタイルがいい。
そこら辺のグラビアアイドルよりも。
わかりやすく言うと胸はメロン尻は桃という感じ。
セクシーなベルリネッタの姿に思わず放心してしまう和樹。
和樹「ゴクゴクゴクゴクゴクゴク」
ジュースを飲みながらチラチラとベルリネッタの方を見る。
その視線に気づいたベルリネッタ。
ベルリネッタ「？？？ご主人様どうかなさいましたか？」

和樹「いや・・・あの・・・その・・・・」
ベルリネッタ「!?も・・・もしかして・・・・・私の水着どこか変ですか?」
和樹「そんなことねえよ・・・か・・・かわいいとおもうぞ・・俺は」
ベルリネッタ「(ボン!顔真っ赤)か・・・かわいい・・わ・・・わたしが・・・えへへへ」
かわいいと言われて有頂天になる。
和樹「ところで前から気になっていたんだが・・・・」
ベルリネッタ「は・・・はいなんでしょうか!!!」
和樹「俺の事をご主人様と呼んでいるけど。
呼びにくかったら前の様に名前で「駄目です!!!」」
ベルリネッタだけではなく。
シェルビー・エスカレードも和樹の事をご主人様と呼んでいる。
第五装甲猟兵侍女中隊の主人になった和樹の事をご主人様と呼ぶのは当然のことなのだが慣れていなのかたまに和樹の事を名前で呼ぶこともある。
それが気になっていた和樹は思い切ってベルリネッタに聞いてみた。
ベルリネッタ「ご主人様は私達のご主人様なんですから、ご主人様って呼びます!!
今はまだ慣れないかもしれませんけどそれども私はご主人様って呼びます!!!」
和樹「ベルリネッタの気持ちはよく分かった・・・けど一つだけいいか?」
ベルリネッタ「はい!なんでしょうか!!」
和樹「・・・・・・顔近いって」
ベルリネッタ「・・・!!!!!??????(ボン!顔真っ赤)す・・・すいません!!」
和樹の言葉で感情的になったベルリネッタは無意識に体が密着するほど近付いていた。

和樹「あ・・あの・・・ベルリネッタ？」
ベルリネッタ「は・・・はい・・なんでしょうか・・・」
和樹「離れてくれるとありがたいだけど・・・」
ベルリネッタ「・・・・・・・・」
自分の理性がやばいのでベルリネッタに離れるようお願いするも全く離れる気配がない。
お互い見つめあい心なしかいい雰囲気になっているが・・・・
シェルビー「ご主人さまぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
ベルリネッタ「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
それによって海の方へ吹き飛ばされそのまま沈んでしまう。
二人の雰囲気を見てむかついたシェルビーのドロップキックがベルリネッタに命中する。
和樹「べ、ベルリネッタ！！！？？？」
吹き飛ばされたベルリネッタを助けにいこうとするが・・・・・
和樹「あ、あのぉ～～～～～～～～シェルビー」
シェルビー「なに～～～～ご主人様」
和樹「ベルリネッタを助けに行きたいから手を放してほしいんだ・・・け・・ど！！？？」
牛らから和樹の手を掴んでいたシェルビーの方を振り向くと。
シェルビーもいつものメイド服ではなく黄色のビキニを身に付けていた。
ベルリネッタに負けず劣らずスタイルがいいシェルビーに思わずまた見とれてしまう。
シェルビー「？？？ご主人様？？？？あ・・・もしかして・・・・・」
和樹「（なんだろう嫌な予感がする）」
ジェルビー「あたしの水着に見惚れていましたね？ご主人様のエッチ」
和樹「そ・・そん・・・なこと・・・ないぞ。」

照れを隠すようにシェルビーから顔をそむける。
シェルビー「んんんんん・・・ご主人様・・・・・・・・可愛いい！！！！！！！！」
ギュウウウウウウウウウウウ！！！
和樹「ちょ・・・ちょっ・・・・・と・・・・」
和樹の反応がツボに入ったのか和樹を思いっきり抱きしめる。
シェルビーのスイカ並の胸が和樹の顔に挟まりかなりおいしい状況になっている。
シェルビー「ご主人様！ご主人様！！ご主人様～～～～！！！」
和樹「ふぐ・・・・ふが・・・・（い・・・息が・・・ってなんかお決まりの感じになってるな・・・・
それにしても、シェルビーキャラが変わったよな）」
和樹がメイドの主人になる前は昔と変わらないシェルビーだったのだが。
メイドの主人になったときに口調も敬語に代わり。
和樹ラブの女の子・・・いやメイドになった。
話は戻り、このままでは和樹の命が危うい。
シェルビーはツボに入っているため全く離れる気配がない。
エスカレード「シェルビーーーー何をやっているの（怒怒怒怒）」
シェルビーの力が少し弱まりシェルビーの後ろを見ると。
そこには、やはりエスカレードもいつものメイド服ではなく。
紺のビキニを身につけて怒りを露わにシェルビーの後ろに立っていた。
愛用の武器ランスとハンドガンを持っていて、右手に持っているハンドガンをシェルビーの後頭部に押し付けていた。
エスカレード「今すぐご主人様から離れなさい。さもないと後頭部に風穴が開くことになるわよ。」
シェルビー「なんで？？あたしがご主人様から離れないといけないの？？？」
和樹の抱きついたままエスカレードの方を振り向きもせず挑発する

ように言い放つ。
エスカレード「（ムカッ！！）私の使命はご主人様にまとわりつく害虫を排除するのが私の使命・・・だから今すぐ離れなさい。」
負けずにエスカレードも反撃する。
シェルビー「（ムカッ！！！）害虫ってもしかしてあたしの事を言っているのかしら（怒怒）」
エスカレード「もしかしてシェルビー自覚しているの？」
この言葉でシェルビーは抱擁を解きエスカレードの方を振り返る。
シェルビー「あんた・・もしかしなくてもあたしに喧嘩売ってるでしょう。」
エスカレード「私こう見えても結果の出てる戦いはしない主義でして。」
シェルビー「上等だわ！！その減らず口今すぐ叩けないようにしてあげるわ！！！」
どこから取り出し、いつのまに握っていたのかシェルビーの右手には愛刀・機械式大太刀
を横薙ぎで攻撃しエスカレードに当てようとするが。
後ろに跳び難なくその攻撃をかわす。
エスカレード「できるものならやってもらいましょうか！！！」
ランスとハンドガンを構え戦闘態勢を整える。
十分な間合いを取り二人の戦闘準備は完了している。
後は、いつどのタイミングで仕掛けるかだけなのだが・・・・・・
ざばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！
海の方から何やら大きな音がしたので戦うのをそっちのけで二人とも視線が海の方へ向いてしまう。そこにいたのは・・・・・
ベルリネッタ「シェルビーーーーーーさっきはよくも邪魔してくれたわね！！（怒怒怒）」
ベルリネッタもどこから出したのか手には大剣ガーディアンソードが握られていた。
シェルビー「ご主人様とイチャついてるベルリネッタが悪いのよ！

！」
エスカレード「フフフフ・・・ベルリネッタも私に叩きのめされたいようね・・・」
不気味な笑いを浮かべ双方を見る。
ベルリネッタ「どうやら、あなた達を倒さないとご主人様とイチャイチャ出来ないようね。」
シェルビー・エスカレード「「それは・・・・こっちのセリフよ！！！！！」」
遂にベルリネッタ・エスカレード・シェルビーによる三つ巴の戦いが始まってしまった。
戦いの余波で周りは荒み。
最初の優雅さの欠片もないほどめちゃくちゃになりつつあった。
実力は三人ともほぼ互角なのでおそらく長丁場になるだろうと踏んだ和樹はその場から少し離れた場所にいた。
和樹「・・・なにやってんだあいつら・・・・・」
殴り合いの喧嘩ならまだしも三人とも武器を持っている。
当たり所が悪ければ命にかかわるかも知れない。
和樹「しょうがね～～なぁ・・俺が止めるか・・・あいつらが怪我するの嫌だし。」
喧嘩を止めるため戦場になっている所に行こうとするが・・・・・
リーラ「和樹様・・お待ちください。」
後ろ振り向くとやはりリーラもメイド服ではなく銀色のビキニを身に付けていた。（和樹を喜ばせる為。）
和樹「待てって・・・あれ止めないとまずいだろ。」
喧嘩している三人を指さす。
リーラ「ここは私に任せてはもらえないでしょうか」
和樹「あの状況をどうにかできるのか？」
リーラ「はい」
静かな返事だがどこか確信に満ちた返事だった。
和樹「ん～～～じゃ～～～頼めるか？」

リーラ「ありがとうございます。」
ここはリーラを信じてみることにしてみた。
和樹を安心させるために和樹に微笑み、ゆっくり三人に近づき・・・・・・
スパーーーン！！！スパーーーン！！！スパーーーン！！！
リーラもどこから取り出したか分からないがハリセンで三人の頭を叩く。
ベルリネッタ・エスカレード・シェルビー「「「「っ～～～～～～～～～～！！！」」」」
余程痛かったのか叩かれた頭をやさしく撫でる。
リーラ「お前たち・・・・・・あれほど和樹様にご迷惑をかけることをするなと言っておいたはずだ！！！！！」
ベルリネッタ・エスカレード・シェルビー「「「「リ・・・リーラ様！！！！」」」」
本能的その場に正座する三人。実はこの三人なぜだかわからないがリーラの事が苦手というわけではないがなぜか頭が上がらないのである。
和樹至上主義のリーラの怒り具合は今ものすごい事になっている。
この後、リーラに先に城に戻ってくさいと言われた和樹は城に戻り。
リーラは三人に説教をした。・・・・三時間近く。
そのあと三人はリーラの命令でめちゃくちゃになったビーチを元に戻していた。
罰として三人は五日間和樹に近づく事を禁止された。
異を唱える三人だったがリーラがギンッ！！と睨みつけると蛇に睨まれた蛙のように縮こまってしまう。
この間リーラは暇さえあれば和樹の傍にいた。
この時のリーラの顔は恋する乙女の顔していたのは言うまでもない。
ちなみそれから五日後和樹に会うこと禁じられた三人は五日たつとすぐに和樹のもとへ向かい。和樹を抱きしめ五日ぶりの和樹を堪能した。この時の三人の顔まさに幸せそのものだったのは余談である。

こうして、和樹の夏休みは幕を下ろす。

番外編？メイドだ！水着だ！戦争だ？（後書き）

これで出会い編は終わりです。
次から新章に移ります。（タイトル未定）
後、もしかしたら新しいメイドが増えるかもしれません。
それではまた次回お会いいたしましょう

第九話　約束

和樹は島での最後の夜に不思議な夢を・・夢を見ていた・・子供もの頃の懐しく・・・忘れかけていた約束の夢・・・
???「ぐす・・・ぐす・・・・ぐす・・・」
昼頃の河原の河川敷で泣いている青髪のメイド服を着ている少女がいた。
散歩に来ていた少年はなぜだかわからないがその少女を放っておくことができなかった。
???「なぁ・・・なんで泣いてんだ？」
???「ぐす・・ぐす・・あなたは？」
和樹「俺は式森和樹、お前は？」
エリーゼ「わ・・・たしは・・エリーゼ・・・もう・・・嫌なの・・・」
和樹「なにが？」
エリーゼ「私・・メイドなんかになりたくないのに・・・メイドのお仕事を教えられて・・
しっぱい・・・したら・・おこられて・・・もう・・もう・・・やだよ・・・」
今日初めて会う見ず知らずの和樹になにもかも話してしまう。
エリーゼからしてみれば話す相手は誰でもよかったのだろう。
とにかく話を聞いてほしい・・・ただそれだけなのだから・・・・
和樹「事情はよくわかんねぇけどよ・・・
嫌な事があったらさ思いっきり遊ぶのが一番だぜ！」
エリーゼ「え？・・・・きゃっ！」

和樹はエリーゼの手をやや強引に掴む。
二人だけだったが二人でいろいろな遊びをした。

鬼ごっこ・かくれんぼ・競争・ボール遊びなど色々な事をした。
遊んで行くうちにエリーゼは最初こそ戸惑いはしたが次第に楽しくなり笑顔になっていた。
楽しい時間というのはあっという間に過ぎ気がついたら夕日が出ていた。

???「エリーゼ!!どこにいるの!・・・戻っていらっしゃい!」
メイド服を着ていた女性が誰かを探しているようだ。
おそらく、この少女だろうと少年は思った。
和樹「あ〜〜〜〜あれ・・もしかしなくても・・・お前の事を探しているよな?」
エリーゼ「う・・・・うん」
和樹「じゃあ行かないときっとお前の事が心配で探しに来たんだぜきっと。」
エリーゼ「・・・・・」
悲しそうな顔で少年の方を見る少女のその顔は寂しそうな顔だった。
和樹「そんな顔すんなって!もう遊べないわけじゃ・・・『駄目なの』え・・・」
エリーゼ「駄目なの・・私・・・明日この島を離れて・・・遠い所でメイドのお仕事を覚えなきゃいけないの・・・」
和樹「そ・・・そうか・・・」
複雑な顔する和樹・・・
そんな和樹に対してエリーゼは首に付けていた青い雫の形をしたネックレスを外す。
エリーゼ「あの・・・これ・・・受け取って欲しいの・・」
和樹「これは?」
エリーゼ「再会と約束の誓い」
和樹「再会は分かるけど約束って?」
エリーゼ「いつになるから分からないけど・・・・もし・・もし今

度出逢う事が出来たら私はあなたの・・・・・・・」
ここで周りは真っ暗になり和樹の夢が終わってしまう。
この夢が何を意味するのかこの時の和樹はよく分かっていなかった。
・・今はまだ・・・

第十話　ブチギレ

島で夏休みを過ごしている時に和樹はあることに気付いた。
それは第五装甲猟兵侍女中隊の住む場所だ。
和樹は幼いころに親を亡くし祖母と祖父の所に預けられた。
その二人も和樹が中二の時に亡くなり和樹はマンションで一人暮らしをしていた。
そのことをリーラに話すと「全て私にお任せください」と言った。
それから、一週間後、あの老人の島から和樹はリーラ・ベルリネッタ・シェルビー・エスカレードを連れて飛行機で日本の空港へ向かいその近くにある船着場から船に乗り初音島の港に降りた。
周りの視線特に男からの好機の視線がリーラ達に集まる。
野次馬Ａ「あの銀髪のメイドさんチョ―美人なんだけど」
野次馬Ｂ「いやいや、俺はあのピンクのメイドさんの方が・・・」
野次馬Ｃ「オイオイ見るね～～な俺としてはあの黄色のメイドもいいね」
不愉快そうな顔をするベルリネッタ・シェルビー・エスカレードの三人、普段なら軽く蹴散らしているところであるが今はリーラがいる。
前の時みたいに罰を与えれたらたまらないから我慢しているのもあるが、和樹には迷惑をかけられないとも思っている。・・・・・・が問題はこれから起こった

野次馬Ｄ「それにしても前を歩いているあの冴えない男」
ブチ
野次馬Ｅ　「どう考えてあいつにはもったいないなっていうか不釣り合いだろう。」
ブチ！
野次馬Ｆ「そうそう、あんな馬鹿面で不細工な奴にはもったいない

よな！」
ブチ！！ブチ！！
野次馬達「「「「「はっはっはっはっはっはっ！！！！！！！」」」」」」」」」」
ブチ！！ブチ！！ブチ！！ブチ！！・・・プッツーーーーーン！！！
野次馬達の心ない野次を無視して進もうとした和樹だが・・・・・
ベルリネッタ「・・・ユルサナイ・・・・・」
和樹「！！？？」
ドスの利いた声がしたので後ろ振り向くと怒りをあらわに大量の血管マークを頭に浮かべたベルリネッタがいた。
ベルリネッタだけではなくシェルビーとエスカレードも怒りをあらわにしていて頭に大量の血管マークを浮かべていた。
ベルリネッタ「ご主人様、申し訳ございませんが急な用事を思い出しましたので、少しこちらでお待ちください（怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒）」
和樹「ああ・・・・俺の事は気にするな（汗）」
シェルビー「ご主人様あたしも少し用事が・・・・（怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒）」
エスカレード「ご主人様・・私も制裁を加えないといけない輩がたった今出来ましたので少々お待ちください。（怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒怒）」
和樹「（こ、こえ～～～～）あ、ああ（汗汗汗）」
和樹が三人の迫力にビビっていると・・・・
リーラ「和樹様」
和樹「（ほ～～～よかったリーラはいつも通りだ・・・・）な、なんだ」
いつも通りのリーラに安心する和樹だったが。
リーラ「私も三人に協力してきますので少々お待ちください。」
和樹「（お前もかーーーーーーー！！！！）」

表情こそはいつも通りのリーラなのだが内心は。
リーラ「（和樹様を侮辱した罪は万死に値するが
そのよう事をしては和樹様に嫌われてしまうかも知れない、
ここはあの罪人たちを徹底的に叩きのめすぐらいで・・・・）（怒怒怒）」
などと何気に恐ろしい事を考えているリーラ。
各々がまたどこから取り出したか分からないが武器を持ち・・・。
リーラ達「「「和樹様を侮辱した罪！その身で償ってもらいます！！！！！」」」
野次馬達「「「「「「「「「「「「「「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」」」」」」」」」」」」
ここからはまさに凄惨だ。
野次馬達がいくら「助けて」「許してください」「謝るから許して」「命だけは」と言っても容赦なく攻撃を加える四人の姿はメイドではなく冥土の使者になっていた。
それから十分後和樹を馬鹿にした野次馬達は一人残らず倒れていた。
（死んではいない）
対して野次馬を蹴散らした四人はさっきの不機嫌具合が嘘のようなすっきりとした顔をしていた。

それからしばらくして、一台の高級車が和樹たちの前に止まった。
ネリー「和樹様お迎えに上がりました。」
和樹「お・・おう、ご苦労さん。」
逃げるように車に乗り込む和樹そしてそれに続くリーラ達。
ネリーが運転席に座り車が出発した。
和樹「そういえばリーラ」
リーラ「何でしょうか？和樹様」
和樹「この車って一体どこに向かっているんだ？」
リーラ「和樹様の新しい新居ですが」
和樹「新しい新居？？？」

リーラ「はい」
和樹がリーラに質問していると車は山の中を進んでいた。
道なりに車が進んでいくとそこには大きな屋敷がありその門前で車が止まった。
和樹「・・・なぁ・・リーラこれが、俺達の・・・」
リーラ「はい、ここが和樹さまの邸宅です。」
和樹が茫然としていると門が開きそこには・・・
メイド大勢「「「「「「「「「「お帰りなさいませ！！ご主人様！！！！」」」」」」」」」」
右側から左側までメイドがずらりと並んでいた。
和樹「た・・・ただいま・・・（す・・・すげぇ〜〜〜〜）」
リーラ「和樹様、お部屋へ案内いたします。」
和樹「あ、ああ・・・頼むわ」
それから少し歩くと和樹の部屋らしき場所に到着した。
リーラに案内され屋敷に入ると玄関も滅茶苦茶広く、天井には大きなシャンデリアがあり周りも高級そうな調度品が飾られていた。
リーラ「ここが和樹様のお部屋です。どうぞ」
リーラがドアを開くとその部屋は和樹が前に住んでいたマンションの部屋より二倍近く広くそして綺麗で大きく。そして高級そうなベットと大きなソファーもあり六十型の大きなテレビもあった。備え付けの冷蔵庫があったので開けてみるとそこにはアルコール以外の飲料が入っていた。クローゼットを開けてみると学校の制服から今まで和樹が来ていた服に加えておそらくリーラがコーディネイトした服が置いてあった。
和樹「今日からここで俺は暮すのか・・・・・」
リーラ・ベルリネッタ・シェルビー・エスカレード」
リーラ達「「「はい、何でしょうか？」」」」
和樹「これから色々と迷惑をかけるかもしれないけどよろしく頼むな。」
和樹の言葉に少しの間呆然としてしまう四人であったが・・・・

リーラ「和樹様、迷惑なんておっしゃらないでください。」
ベルリネッタ「そうですよ！
和樹様に快適に満足した生活を送ってもらうために私達が居るんですから！」
シェルビー「ご主人様はあたしたちのご主人様なんですから・・・・・」
エスカレード「どんどん私達を頼ってください！！」
和樹「ありがとな皆・・・これからよろしく頼む」
リーラ達「「「「はい！！ご主人様！！！！」」」」
こうして和樹の新しい生活が始まった。

第十一話　和風（前書き）

新しいメイドが出てきます。
あの和風メイドが・・・・・

第十一話　和風

新生活が始まった次の日から和樹の高校生活始まり一週間の月日が流れた。
この一週間の間に和樹は自分が通っている風見学園の理事長であり和樹の恩師である芳乃さくらという人に自分が百五十人近くいるメイド達と暮らしていることを報告した。
このことを話すと・・・・
さくら「にゃはははは！！
あんまり羽目を外しすぎてメイドさん達にエッチなことしちゃダメだよ和樹君！」
などと言われてからかわれてしまう和樹であった。
ちなみに、和樹は友人達には話していない。なぜなら必ず面倒なことになるから。

そして、現在朝。
いまだ寝ている和樹の部屋に一人のメイドが入ってきた。
？？？「旦那様起きてください。朝食が覚めてしまいますよ」
ユサ、ユサ、ユサ
和樹「う、う～～～～ん・・あ・・・後・・・・二十四時間・・・」
？？？「丸一日寝るつもりですか！！旦那様！！！学校に遅れてしまいますよ！！！」
メイドの鋭いツッコミ部屋に響く。
和樹「あ～～～分かった分かった起きるよ・・・・おはよう・・いろは」
いろは「はい、おはようございます旦那様」
和樹を起こしに来たメイドいろはは三日前この屋敷にやってきた。
いろはは『自分をここのメイドとして雇ってください』といきなり言ってきたのだ。

いろはの目にウソはないと判断した和樹はいろはを雇おうとしたがリーラに反対されてしまう。だったらいろはのメイドとしての適性と和樹に対する忠誠心を見て決めることを提案したリーラ。
彼女のメイドとしての適性能力の高さと和樹に対する忠誠心を見たリーラは第五装甲猟兵侍女中隊のメイドとしていろはを迎え入れたのである。
いろはの来ている服はいわゆる和服メイド服。
ただしかなり露出が激しいのを着ている、前も凄いが後ろも凄いことになっている。
ちなみに和樹を起こすメイドは周番制になっているらしい。
目が覚めた和樹はクローゼットに向かい制服を出し着替えようとするが。
和樹「・・いろは・・・」
いろは「??何でしょうか?旦那様??」
和樹「部屋にいられると着替えられないんだけど」
いろは「・・・・し、失礼しました!」
慌てて部屋から出ていく。

クローゼットを開け制服を取り出し。
着替えながら和樹はあることを考えていた。
和樹「ん〜〜〜どこかでいろはに会ったことがあるような気がするんだよな〜〜。」
和樹はいろはを見るたびにどこで会ったような気がしてならないのであった。
一度だけいろはに聞いてみたことがあるのだが・・・・
いろは「だ・・だん・・・な様の・き・・気の・・せい・・だと思いますよ?」
明らかに何か隠している口調ではぐらかされてしまう。
言いたくないのなら無理にはと思った和樹はこれ以上の事は聞かなかった。

いつか自分から話してくれる事を信じて・・・

制服に着替え終わった和樹は部屋の前で待機していたいろはと一緒にリビングへ向かう。

リビングのテーブルにはすでに朝食が用意されていた。

和樹「今日の朝食は和食か・・・・」

リーラ「おはようございます。和樹様本日のご朝食はいろはが作られたものです。」

和樹「そうか・・それは楽しみだな」

和樹が自分の席に座ると待機していた中隊長クラスのメイドも自分の席に座り和樹と一緒に朝食を食べ始めた。

和樹「ん～～～～美味いなこの味噌汁」

いろは「本当ですか！旦那様！！」

和樹「ああ、いろはに和食を作らせたら天下一品だな」

いろは「あ、ありがとうございます！旦那様！！」

褒めれて天にも昇るぐらいの気持ちになる。

和樹「やっぱりうまい飯は一人で食べるよりみんなで食べたほうが美味いな」

最初のうちは一人で飯を食っていた和樹だが一人では味気ないということで中隊長クラスのメイド（ベルリネッタ・シェルビー・エスカレードを含む）は和樹と一緒に朝食を摂るようになっているが。

リーラだけは頑なにそこだけは譲ってくれず和樹の後ろに待機している。

バキッ！！！！！！！！×3

何かが壊れたような音がした方を見ると・・・・・・・

ベルリネッタ「（なんなんですか！！！あの破廉恥メイドは！！！！ご主人様もデレデレして！！！）」

エスカレード「（ちょっと胸が大きいからってご主人様あんなエロそうな顔でいろはの胸をチラ見して！！！！胸だけじゃなくいつでも、私の全てを見せて・・・・・）」

シェルビー「（これは忌々しき事態ね・・・
このままじゃあの破廉恥女に和樹を取られちゃう！！
・・・ここはもっとあたしも大胆に！！！！）」
三人の手を見てみると握り潰された箸が握られていて。
３人の頭の上には大量の血管マークが浮かんでいた。
和樹「（・・・俺・・・・なんかしたか？）」
３人が怒っている原因が全く分かっていない和樹であった。
ちなみに和樹の後ろに控えているリーラはと言うと。
リーラ「（和樹様は胸が大きい方がいいのだろうか？）」
と自分の胸を見ていた。
全く気にする必要がないと思うのだが・・・・・
逃げるように朝食を食べ終えた和樹はリーラに自分の身の回りを整えてもらいベルリネッタが作った弁当（弁当を作るのも当番制）を受け取りリビングを後にするとメイド達が左側と右側にズラリと並んでいた。
メイド達「「「「「「「いってらっしゃいませ！！ご主人様！！！！！」」」」」」」
和樹「行ってきま～～す。」
最近少しずつこの雰囲気が慣れたのか軽い挨拶をして学校へ向かう。
そして今日和樹はある女性と運命的な出会いを果たす。

第十二話　学園生活

和樹が学校へ向かっているとき、初音島の港に一人のメイドがいた。
そのメイドは青いメイドの服を着ており髪はロングで青髪が美しい。
青髪のメイドは懐かしそうな顔で周りを見ていた。
???「この島に来るのも久し振りですね・・・この島に私の・・・
この世でたった一人の私のご主人様が・・・・・あの日約束を交わ
した私のご主人様・・」
長髪で青髪のメイドは荷物を手に歩き出す。
自分のこの世でたった一人のご主人様に会いに・・・・・・

一方和樹はいつも通りの桜が左右に並んでいる通学路を歩き風見学
園に向かっている。
この時和樹は一週間前の事を思い出していた。
一週間前リーラ達と暮らしだした初日の登校日に・・・・

〜〜〜回想中〜〜〜
和樹「それじゃボチボチ行くか。」
リーラ「分りました。さっそく部下に用意させます。偵察班を編成
して先行させ、進路上の障害を確認の後、本隊を出撃させます。和
樹様には装甲車両に乗っていただき、万全の態勢で登校していただ
ければ・・・・」
和樹「イヤイヤ！！そうじゃなくてな・・・・
んな大名行列みたいなことしなくて大丈夫だって。」
リーラ「ですが安全を確保しませんと万が一のときの対処が・・・・
」
和樹「ただ学校行くだけだから・・・」

リーラ「では護衛の人数を減らします。四班編成にして周辺警戒をすれば・・・・」
和樹「だからそうじゃねぇって。普通にすればいいんだよ。ただ学校行くだけなんだし。」
リーラ「・・・・護衛車両をつければ安全かと。」
頑なに和樹に護衛をつけたがるリーラに和樹は少し困っていた。
和樹「・・・・リーラは俺の頼みを聞いてくれないのか？」
咄嗟に出た言葉だったが意外にも効果は絶大であった。
リーラは黙り、しばらく考え込んだ。
リーラ「申し訳ありません。出過ぎた真似をしました。」
深く頭を下げる。
リーラ「和樹様の望みをかなえるのが務めにもかかわらず、差し出がましい態度に出るとは、メイドの本分にもとります。お詫びのしようもございません。」
和樹「何もそこまで言わんでも。」
リーラ「わかりました。和樹様それではこれをお持ちになってください。」

回想終了。
そう言って渡されたのが・・・・・
和樹「これだもんな～～～～」
和樹の携帯についているモップのストラップ。
実はこれモップの柄を取ると屋敷中に非常警報が発令するようになっている。
なにか危険な事があったらこれで知らせことができる。
これだけではなく和樹には一応ある程度目立たないよう護衛が付いていた。
ちなみに和樹もどういう風に護衛が付いているかはある程度は把握している。

そんな事を考えているうちに和樹が通っている学校風見学園に到着した。
下駄箱で靴を履き替え自分の教室に向かう。
教室のドアを開け自分の席に着く。
???「よっ！和樹おっはーーー！！」
和樹「あいかわず無駄に元気だな。渉」
後ろから声をかけてきた男の名前は板橋渉。
和樹の昔からの親友だ
渉「無駄に元気ってこれが俺の取り柄なんだよ！悪いか！」
???「ああ・・・悪いな少なくとも俺は迷惑だ。」
???「その意見に関してはおれも同感だな。」
二人の会話に入ってきたのは桜内義之。
この男も和樹の昔からの親友だ。
そしてもう一人は杉並。
彼だけは昔からの親友ではなく去年に知り合った和樹の親友だ
渉「義之～～杉並～～お前達までそんなこと言うのかよ～～～～」
義之「所で和樹・・・・」
渉「俺は無視ですか！！」
杉並「喜べ、それがお前だ板橋。」
渉「嬉しくね～～よ！！」
和樹「なんだ、義之」
義之「お前一昨日の数学の課題やったか？」
和樹「ああもちろんやってるぞ」
少し間を空けて義之は・・・・
義之「頼む！！数学の課題を見せてくれ！！
今日俺当てられるかもしれないだよ！！」
意外にも和樹は頭がいい学年成績のトップテンに入るくらい。
和樹「おいおい・・またかよ」

涉「和樹～～～俺にも～～～」
和樹「はぁ～～～～しょうがね～～～な・・・ほら」
カバンから数学のノートを取り出し義之に渡す。
義之・涉「「心の・・・・友よ～～～～～！」」
ノートを借りた二人は大急ぎでノートを移し始める。
これもいつもの光景である。

それからしばらくして担任の教師が教室入ってきてホームルームが始まる。
ホームルームが終わりそれからいつも通りの授業が行われ。
すぐに昼休みとなった。
涉「和樹飯どうする？購買でも行くか？
和樹「あ～～今日も俺弁当があるから」
そう言うとカバンから弁当箱を取り出す。
涉「またかよ・・・ここんとこ毎日だな。」
???「そうよね・・・前は弁当なんて全然持ってこなかったのに。」
???「そうそう！お弁当だけじゃなくて制服もきちんとアイロンが掛かっているし。」
和樹「な・・・何言ってるんだ二人とも・・そ・・そんなことね～～よ。」
???「ちょ・・・ちょっと～～～二人とも～～詮索はよくないよ～～～」
小さい女の子の名前は雪村杏。彼女とは去年知り合いそれから親友となった。
もう一人の背が高くスタイルのいい女の子の名前は花咲茜。
彼女とも去年知り合いそれから親友となった。
おどおどしている女の子は月島小恋。
彼女も去年から知り合いそれから友人となった。

ちなみに杏・茜・小恋の三人は雪月花と言われている。
茜「和樹君の事は後で聞くとして・・・せっかくだからみんなでご飯食べない？」
渉「俺はもちろんオッケ～～～！」
義之「俺もいいぜ」
杉並「俺も断る理由がない」
和樹「・・・・・・・」
正直和樹はこの場からすぐに逃げ出したかった。
なぜなら確実に面倒なことになるから。
杏「和樹・・一応言っておくけど逃げ出さないでね。」
全てを見透かしたような口調で言う。
和樹「わかったよ・・・俺も同席するよ。」
しかし、和樹は知らない本当に面倒な事が起きるのはこの後だということに・・・・

第十三話　あの日交わした約束

購買でパンを買ってきた渉が到着すると机を囲って昼食が始まった。
和樹が弁当箱を開けると周りからオ～～～～という感嘆の声がする。
見た目こそは普通の弁当なのだが品があり食欲をそそる弁当だ。
杏「へぇ～～～～今日も相変わらずね」
渉「オイオイ和樹の弁当今日も無茶苦茶うまそうじゃね～～～か。」
小恋「本当・・・おいしそう」
茜「和樹君ってこんなに料理が上手だったけ？」
義之「俺でもここまでのものは作れないぞ」
杉並「確かにこれはなかなかのものだな。」
皆がものほしそうに和樹の弁当を見るので・・・・
和樹「しょうがね～な・・少し食べるか？」
少しだがおかずを分けた。
義之「いいのか？和樹」
和樹「ああ、少しだけならいいぞ。」
渉「それじゃ遠良なく～～～」
渉が和樹の弁当のおかずを少しだけとると皆も一斉に和樹のおかずに箸をつけた。
味の感想は言うもでもなく・・・・・
皆「「「「「うん！うま～～～～～～～い！！！」」」」」
分けたおかずのお礼に杏と茜と小恋の弁当からおかずを少しだけカンパしてもらった。
この後、杏と茜と杉並になんで生活習慣が変わったのかを聞かれた。
まさか、メイド達と暮らしているからなどと言えるはずもなく。
適当にごまかした？杏達は疑惑の眼差しで和樹を見ていたが・・・・
こうして昼休み終了間際の時間になったので。
周りを片づけ自分の席に着き午後の授業を受けた。
滞りなく授業も進み気がつくと今日の授業は終わっていた。

放課後・・・・・・・・・
担任連絡事項が終わりカバンに荷物を入れ帰る準備をしていると。
渉「なぁ和樹今日なんか用事あるか？」
和樹「いや特にないけど。」
渉「だったらさ久々にゲーセンいかね？今日俺部活が休みでさ。
せっかくだと思ってな。」
和樹「ゲーセンか・・・・久々に行くのも悪かないな。」
渉「だろ！だろ！」
和樹「折角だから義之も誘うか・・・・義之お前はどうする？」
義之「いいぜ俺も家帰ってもすることねーし。」
渉「よし！決まり！！あと杉並も誘おうぜ！」
杉並の席を見ると・・・・
義之「いね～な・・・」
和樹「あいつが突然どっかに行くのはいつものことだろ。」
かばんを手に持ち教室から出ようとすると・・・・・
生徒A「オイオイ聞いたかよ今正門すんげ～美女がいるって～の」
生徒B「マジかよ！！」
和樹「（なんかあったのか？）」
放課後は互い騒がしいのだか今日は何かがおかしい。
生徒C「しかも、その美女メイド服を着てるんだと！！」
和樹「！！！！！？？？？」
生徒D「嘘だろ！！それは見に行くしかないだろ！！」
謎の美女メイドを一目見るために急いで（主に男）正門へ向かつていった。
和樹「（メイド？リーラ達には迎えに来る必要はないと言っておいたはずだが？）」
今学校に来ている謎のメイドの事を考えていると・・・・・
渉「なぁ～～～～義之～～～和樹～～～ゲーセン行く前に～～～」

義之「わーーってるよ。謎の美人メイドを一目見たいだろ？」
渉「流石義之分かってる～～というわけさっそく行こうぜ！」
義之「おい、和樹どうした？早く行くぞ。」
和樹「ん？あ・ああ悪い今、行く。
（今ここで考えても仕方ないか行けばわかることだしな。）」
渉が急かすので急いで校門に向う。

校門の前にたどり着くとそこは多くの人だかり（全て男）が出来ていた。
どうやら渉と同で謎の美人メイドを一目見ようと思って集まったのだろう。
和樹「渉どうする？これじゃ一目見るにも一苦労だぞ。」
義之「うわ～～～～かったる。～～～」
渉「でも俺は一目でいいから見たい！！それが男ってもんだろうが！！！」
そう言うと人垣を強引にどかして前に進み出す。
和樹・義之「「はぁ～～～～～しょうがね～な。」」
渋々、渉の後に続く和樹と義之。
人垣を分けて進んでいくと人と人の間から和樹は謎の美人メイドを一瞬だけど見ることができた。謎の美人メイドは足元に荷物を置いていて、眼を瞑って壁に寄り添っていてまるで誰かを待っていようだった。
和樹「（あれが噂の美人メイドか・・・家にあんなメイドいたか？いやいないな、それよりもあのメイドどこかで会ったような気が。）」
謎の美人メイドを一目見た瞬間和樹は妙な違和感に襲われた。
それを確かめるために歩くのを速める。
すると謎のメイドの目が開き偶然にも和樹と眼が合う。
思わず足が止まる。そして謎のメイドは小声で・・・・・・

謎のメイド「・・・・見つけました・・・ご主人様。」
さっきまでぴくりとも動かなかったメイドが自分を囲っている人垣に向かって行く
人垣もなぜだかわからないが謎の美人メイドの邪魔にならないように道を開ける。
そして、和樹は気付いた。
謎の美人メイドは自分の所に向かっていることを・・・・だが
渉「オイオイ和樹！義之！あのメイドさんもしかして俺の所に来ているよな！！！！」
和樹・義之「「・・・・はっ？」」
ここに、とんでもない勘違い・・・もとい馬鹿がいた。
渉「来た来た来た来た来た来た〜〜〜！！！俺の時代が来た〜〜〜〜〜！！！！！」
ついに俺にもモテ期到来か〜〜〜〜！！！！よっしゃ〜〜〜！！！！」
和樹・義之「「（駄目だこいつ・・・はやくどうにかしないと・・・・）」」
一方謎の美人メイドは当然渉のところでも義之の所でもなく。
和樹の所に向かっている。そして謎のメイドは和樹の目の前に。
和樹「（やっぱり俺はこの子の事にどこかで会ったことがある。
しかし、一体どこで・・・・・）」
一人モンモンと考えていると。
謎のメイド「やっと・・・・・見つけました。」
潤んだ目で和樹を見上げる。
和樹「え？」
謎のメイド「私のこの世界でたった一人の私のご主人様！」
いきなり和樹に抱きつく謎の美人メイド。
人垣（全て男）「「「「「「「「「「はぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！」」」」」」」」」」
周りは喧騒で満ち溢れるが・・・・・謎のメイドは完全にそれを

無視している。
和樹「お・・・お前は一体・・・・・」
謎のメイド「私のこと覚えていませんか・・無理もないですね。・・・あれから随分と時も経ちましたし・・・・」
謎のメイドは和樹の頸にぶら下っている。
青い雫の形をしたネックレスに手をかけた。
和樹「お・・おいそれは・・・・」
謎のメイド「このネックレスのことも覚えていませんか？」
和樹「このネックレスに触るな！
このネックレスはな昔俺がある女の子から・・・ってまさか・・・」
和樹は記憶のピースは完成し全て思い出した。
和樹「まさかお前・・・エリーゼか？」
ようやく自分の事を思い出してくれた和樹にエリーゼは思わず笑顔になり。
和樹から少し離れると。
エリーゼ「そうです・・わたしです。ご主人様。
子供の頃に交わした約束・・・ご主人様のメイドになるために参りました。」
エリーゼのとんでも発言に周りは・・・・・・
人垣（全て男）「「「「「な・・・・・何！！！！！！！！！！！！！」」」」」」
比喩でも何でもなく周りがあまりの絶叫に揺れる。
和樹「（おいおい最近の俺の周りはどうしたんだ。
メイドと縁がありすぎぎじゃね〜か）」
そんな事を考えていると・・・
渉「か〜〜〜ず〜〜〜き〜〜〜何でお前なんだよ〜〜〜〜〜！！！」
和樹「はぁ〜〜〜〜！！？？」
和樹を強引にエリーゼから引き？がし。
和樹の両肩を持ち、物凄い勢いで和樹を揺らす。
渉「なんなんだよこれせっかく俺の時代が来たのに何でお

前なんだよ！！！
お前みたいなやつはな～～～～～！！！！！！」
和樹「ちょ・・・止めろ・・・渉・・・」
嫌な予感がするので渉に止めように言うが全く聞く耳持たずである。
そして、和樹の予感は的中する。
エリーゼは自分の愛用の青い槍フラッシュスピアを出し。
バキッ！！！！！！！！！
渉「ふが～～～～！！！」
渉を殴り飛ばした。
エリーゼ「ご主人様に危害を及ぼすものは私が排除します。」
和樹「ちょっ・・・待て！！！エリーゼ！！！」
エリーゼ「ご主人様？なぜ止めるのですか？この者はご主人様に・・・・」
和樹「どうしようもない馬鹿な奴だけど俺のダチなんだよ。
今のだって駄々ふざけていただけなんだし。だから槍をしまってくれ頼む。」
和樹に言われて少し考える。
エリーゼ「分りました・・和樹様がそこまで言われるのでしたら。」
微妙に納得していない顔だったが武器をしまう。
武器をしまってくれたエリーゼにホッとしていると。
まわりは先刻以上の人だかりになっていた。
和樹「これ以上騒ぎになるのは不味いな・・・・）エリーゼ！」
エリーゼ「？なんでしょうか？」
思わず和樹はエリーゼの手を握る
和樹「義之！悪いけど渉のこと頼めるか？」
義之「あ・・ああそれはいいけど明日ちゃんと説明しろよ。」
和樹「わ～ってるよ（やっぱそうなるか）エリーゼしっかり掴まっていろよ。」
エリーゼ「はい、ご主人様」
エリーゼの手を引きさっきまで物凄い速さでエリーゼが待っていた

所まで行き一旦止まる。

エリーゼが手に荷物を持ったのを確認すると再び物凄い速さで走る。

人垣（全て男）「「「「「「あ・・・・あの野郎～～～～～！！

！！！！！！！」」」」」」

後ろからは何やら聞こえるがそんなものは無視した。

そして和樹は明日は、面倒事になるなと思っていた。

第十四話　滅茶苦茶

エリーゼの手を引き全力疾走で校門から走り去った和樹は人垣をまいたことを確認し。
エリーゼの手を放す。
手を放した後は特に会話もなく（というより和樹は何を話していいか分からない）
エリーゼの方は決して和樹の前を歩かず、和樹につき従うように後ろを歩く。
学校ほどではないがある程度の視線が集まる。
それだけ、エリーゼが美人だということだ。
和樹は時折ちらちらと後ろを振り向きエリーゼを見る。
和樹「（それにしても、子供の頃に会った。
あの、エリーゼがこんなに綺麗なるなんて、世の中分からないもんだな・・・って
現実逃避してる場合じゃねぇな。エリーゼの事リーラに何て言おう。）」
そう和樹は言い訳ではないがリーラにどう言おうかと考えていた。
リーラは和樹の頼みは大概は了承してくるのだが。
ベルリネッタ・シェルビー・エスカレード・いろはの四人は納得しないだろうなと思った。
いろはを迎え入れたときだって和樹が二時間近く自室で色々・・・じゃなくて。
ベルリネッタ・シェルビー・エスカレードにお願いし、渋々了承してくれたようなものだ。
いろはもいろはで和樹がほかのメイド仲よくしていると機嫌が悪い時がある。
言うまでないが和樹はなんでいろはが怒るのか分かっていない。
和樹「（また、あいつらに説明しなきゃいけないよな。はぁ～～～

〜）」
考え事をしているといつの間にか家の門に到着した。
どういう訳かわからないが。
和樹が帰ったと言わなくても和樹が門に近づくと勝手に門が開くよ
うになっている
そして、いつも通り左右にメイドがずらりと並んでおり・・・・・
メイド達「「「「「「「「「「お帰りなさいませ！！ご主人様！
！！！！！」」」」」」」」」」
和樹「おう、ただいま」
メイド達の出迎えに応え、エリーゼを連れてある程度進むと。
リーラ「お帰りなさませ和樹様。」
ベルリネッタ・シェルビー・エスカレード・いろは
「「「「お帰りなさませご主人様（旦那様）！！！」」」」
リーラ「和樹様・・・そちらのメイドは？」
和樹「（やばい・・・エリーゼのことなんて言おうか・・・・・・）」
悪いことをしてるわけでないのに慌てていると・・・
エリーゼ「本日より、第五装甲侍女狩猟中隊に配属することになり
ました。
エリーゼ中尉（パーラメイド）と言います。以後よろしくお願いします。」
リーラ「ＭＭＭ本部よりは話は聞いている。書類を確認したいから
私の部屋に」
エリーゼ「はいわかりました。」
リーラ「私はエリーゼと話がありますので和樹様また後ほど」
和樹「ああ分かった。」
内心ホッとする和樹であった。
エリーゼがリーラに付いていく時一瞬だけど眼が遭った。
なぜだか、分らないがエリーゼの眼は何かを言っていてその内容が
分かった。
エリーゼ「ご主人様後でお部屋に伺います。」

とそう言う風に言っていような気がした。
自室に戻ろうとした和樹だが・・・・
ベルリネッタ「ご主人様少しお聞きしたことがあるのですが？」
和樹「？？なんだ？」
ベルリネッタ「ご主人様・・あのエリーゼというメイドとどういう関係なのですか？」
和樹「・・・・・は？？？」
先程の意味深なエリーゼからの視線事に気付いたのは和樹だけではなかった。
しかも、どうやらその訳が気になるようだ。
シェルビー「それはあたしも気になりました。
あのメイドご主人様の事を愛おしそうに見ていましたから。」
いろは「そうですよ、旦那様エリーゼさんのご主人様を見るときのあの顔まさに
恋する乙女の顔でしたよ」
エスカレード「ご主人様・・・私の部屋で私にだけは教えてくれませんか？」
シェルビー「あんた何ドサクサに紛れて何とんでもないこと言ってんのよ！」
三人の視線がエスレードに集中する。
さすがにまずいと思ったのか。
エスカレード「チッ・・すいません間違えました。」
ベルリネッタ「どんな間違いよ・・・・」
和樹「（今、エスカレードの奴舌打ちしなかったか？）」
なんかよく分からないが気まずい雰囲気になる。
和樹「（ここで下手に隠すと後で色々とまずいよなやっぱ・・・仕方ない）
分かった話してやるよ。」
四人「「「「本当ですか！！！！！」」」」
和樹「ああ、正し聞いてもあまり面白い話じゃないぞ。」

和樹はエスカレード達に全て話した。
子供の時泣いてるエリーゼを放っとけなかったこと。
一緒に遊んだこと。
あの日交わした約束の事。
エスカレード達に全てを話し終える。
これで、少しは理解してくれるかなと思った和樹だったが。
いろは「・・・・ずるいです・・・・」
和樹「え？」
いろは「するいです！ずるいです！ずるいです！！！！
私も旦那様とそういうロマンチックな約束をしたいです！！！」
頬を膨らませ子供のような事を言い出すいろはに思わず
和樹「はぁ！！！！！」
と吹いてしまう和樹であった。
エスカレード「ご主人様、今からでも遅くありません。」
和樹「？？？？」
エスカレード「『俺から離れないでくれ』っという約束を私とかわしませんか。」
シェルビー「何言ってんの！！！そういう約束はあたしと・・・・」
ベルリネッタ「いいえ！私がご主人様と約束するんです！！」
いろは「旦那様と約束を交わすのは私です！！！」
何かおかしな方向に話が進んでいる。
そう思った和樹であった。
それから、十分後リーラがエリーゼを連れて部屋に戻ってきて四人の頭にハリセンを叩きこみその場を収めた。
その後、頭にたんこぶを浮かべた四人と一緒に食事を取り。
風呂に入って寝間着に着替えて自室に向かった。

第十五話　謝罪そして忘却

自室で和樹はベットに座り今日起こったことを改めて振り返っていると。
コンコン
エリーゼ「エリーゼです入室してもよろしいでしょうか？ご主人様。」
和樹「ああ、いいぞ。」
和樹の了解を取り入室する。
エリーゼ「ご主人様・・・ありがとうございます。」
和樹「なにがた？」
エリーゼ「子供の時に交わした約束の事です。
ご主人様が約束を忘れていたらどうしようかと思いました。
ですけどご主人様は覚えていてくれました。これほど嬉しいことはありません。」
和樹「エリーゼ・・・」
エリーゼと再会するまで約束を忘れていたとはとてもじゃないけど言えなかった。
そんな事を言えばエリーゼは傷つくと思った。
だから、和樹が心の中でエリーゼに詫びた。
和樹「（悪かった）」
と心の中で謝罪した。
エリーゼ「ご主人様さしてがましいのですが。私のお願いを聞いていただけませんか？」
和樹「別にいいけど・・・」
顔を赤くして手を下にやして手をモジモジしている。
よほど言いづらいことなのかなかなか口を開かない。
和樹「なぁ、言いづらい頼みなのか？」
エリーゼ「いえ・・そう言う訳じゃありませんけど。」

和樹「じゃあ遠慮せずに言ってみろ、エリーゼの頼みなら大概の事は聞いてやるからさ。」
ここまで言えば言ってくれるかなと思った。
しかし、和樹のこの考えは甘かった。
エリーゼ「分りました。それでは言います。」
和樹「おう、ドンとこい。」
エリーゼ「こ・・今晩だけ一緒に寝てもいいですか？」
和樹「・・・・・・え？」
エリーゼの衝撃発言に呆然となる。
エリーゼ「今晩だけ・・今晩だけお願いします！」
和樹「あ・・いや・・その」
正直、和樹は参ったなと思っていた。
確かに、頼みを聞くとは言ったが。まさかこういうことだとは思ってもみなかった。
そして、追い打ちをかけるように・・・・
エリーゼ「お願いしますご主人様・・・今宵だけは・・・・
今宵だけはご主人様と一緒にいたいんです。」
上目遣いプラス涙目で和樹を見上げ懇願する。
和樹「うっ・・・・一度言ったことは曲げたくないしな・・・
分かった・・・今晩だけはいいぞ。」
乙女の最強コンボに和樹が勝てるはずもなく陥落してしまう。
エリーゼ「本当ですか！」
和樹「ああ、俺に二言はないよ。」
エリーゼ「ありがとうございます！ご主人様！！」
和樹が今日見た中で最高の笑顔になった。
これは余談だがリーラ達和樹と一緒に寝たいと思っているがそれが出来ない。
それは、恥ずかしいからである。
前に一度だけ和樹に言うとしたことがあるのだが。
恥ずかしさの余りその場から逃げだしてしまった。

ちなみにリーラは適当な理由を付けて逃げた。
和樹「（リーラ達にばれませんように）それじゃ、もう寝るか」
ばれないことを祈りながらベットに寝そべる。
エリーゼ「ご主人様・・もう一つお願いがあるのですがよろしいでしょうか？」
和樹「？」
思わずキョトンとなる。
エリーゼ「窓の方を向いてもらってもよろしいでしょうか？」
和樹「ああ、それぐらいならいいぞ。」
エリーゼに背を向け窓の方を向く。
無茶なお願いじゃなくて思わずホッとするが・・・・
和樹の後ろで何か音がする。
シュルシュルっていう音が・・・・そして・・・・・・
エリーゼ「それでは、ご主人様失礼します。」
ギュッ！
和樹「！！？？」
ベットに入ったエリーゼは後ろから和樹に抱きついた。
そして、和樹は違和感を感じた。
和樹「（なんか、感触が柔らかくないか？）」
違和感の正体を知るためにちょっとだけ後ろを振り返ると・・・・
和樹「（！！？？ちょ・・エリーゼの奴・・なんで下着姿になってんだ！！？？）」
ブラとパンツの色が青色の下着を付けているエリーゼに緊張してしまう。
さっきの音の正体。和樹が感じた違和感。
エリーゼはメイド服を脱ぎ下着姿で和樹のベットに入ったのだ。
和樹「（おいおい！？これじゃ俺の方が寝れねーーーよ！
そう言えば妙に静かだな・・エリーゼはもう寝たかな）」
さっきと同じ要領で一瞬だけ後ろを見ると。
和樹「（寝てるし～～～～！！？？）」

母親に抱かれて眠る子供のように静な吐息を立てて寝ていた。
エリーゼ「う～～～ん・・・ご・・・ご主人様・・」
呼ばれたので後ろを一瞬だけ見る。
和樹「（なんだ、寝言か・・・・）」
と安心していると。
エリーゼ「ご主人様・・・寂しかった・・・寂しかったです・・・
ご主人様に・・・・・会えなくて・・・寂しかったです・・・・・」
悲しい声で寝言を言う。
そして和樹はあることに気づいてしまった
和樹「（そうか・・エリーゼ俺に甘えたかったんだな・・・
一人でずっと寂しかったんだな・・・・・
だけど、安心しろ俺が出来る限り側にいてやるからな。）
寝ているエリーゼに心の中で誓った。
もう寂しい思いはさせないと・・・・・・・

第十六話　友達ご案内（前書き）

久しぶりの投稿です

第十六話　友達ご案内

翌朝いつもより早く起きた和樹が後ろを振り向くとエリーゼの姿はなく机の上に一枚の紙が置かれていた。その紙にはこう書いてあった。

エリーゼ「私の我儘に付き合っていただきありがとうございます。」と、エリーゼがいないのは和樹に気を使って和樹よりも早く部屋を出たため。

その気遣いに和樹は感謝していた。

リーラ達に見つかったら大変なことになるから。

せっかく早く起きたので制服に着替える。

制服に着替え終わると・・・・・・・・

コンコン

ベルリネッタ「ご主人様失礼しま・・・・す！？」

和樹「おはよう、ベルリネッタ。」

ベルリネッタ「お・・おはようございます。ご主人様今日は早いですね。」

和樹「たまには早く起きるのもいいかなってな」

ベルリネッタ「そ・・・そうですか・・・（もう少し寝てくれてもいいのに）」

和樹「ん？何言ったか？」

ベルリネッタ「い、いえなんでありません。あはははははは。」

和樹「？？？？？？？？」

和樹の寝顔を堪能しようと思っていたが。

和樹がいつもより速く起きていたので心の中で落胆する。

そんなベルリネッタに気付いていない和樹はベルリネッタと一緒に食堂へ向かう。

食堂へ向かうとメイド達が和樹にあいさつをし、和樹もそれに応えると自分の席に着く。

席について周りを見るとエリーゼも座っていた。
昨日と同じでいつも通りの表情のエリーゼがいた。
しかし、心の中では。
エリーゼ「（ああ・・駄目です。・・・
昨日の事があってご主人様のお顔を見ることができません。
ご主人様がお帰りなるまでにどうにかしませんと。）」
などと内心思っていた。
そのことに全然気づいていない和樹は朝食に食らいつく。
今日の朝食は洋食。担当はエスカレードだ。
朝食を終えた和樹はエスカレードから弁当を受け取る。
リーラ達「「「「行ってらっしゃいませご主人様（旦那様）！
！！！」」」」
メイド達「「「「「「「「「「「「行ってらっしゃいませご主人様
！！！！！！」」」」」」」」」」」」
いつ通りリーラ達とメイド達に見送られ学校へ向かった。

いつも通りの通学路を歩いていると周りの生徒からの視線とヒソヒソと噂話が聞こえる。
和樹「（ああ〜〜〜これってやっぱ昨日のだよな・・・・）」
そう、昨日の一騒動が噂話になっていた。
生徒A「オイオイ、あいつの昨日の・・・・」
生徒B「ああ、式森和樹だ・・・沢山のメイドさんを囲っているという。
生徒C「女にもてる奴は死んでしまえ。」
女生徒A「え〜〜あの式森君が信じられない・・・」
女生徒B「私、密かに狙っていたのに・・・」
女生徒C「あたしもメイドになろうかな？」
などと心にもない事を言ってる。（男限定）
一方の和樹は別に全く気にしてはいない。

なぜなら少しも悪い事はしていないと思っているから
そして、和樹はそれと同時に安心感もあった。
和樹「（この場にリーラ達がいたあいつらまた怒りにまかせて大暴れするだろうな。）
などと思っていた。
ちなみに、和樹はそれなりにもてる方であった。
そんなことを考えていると学園に到着した。
下駄箱で靴を履き替え教室に向かう。
教室に入るとクラスメートの視線が和樹に集まる。
和樹「ふ～～～かったる。」
などと言いつつけけだるそうに席に着く。
義之「よっ！和樹大分参っては・・・・・いないな」
和樹「この程度で参るほど柔じゃねぇよ。所で義之なんか用か？」
義之「昨日の事をちょっとな・・・」
昨日去り際に明日事情を説明することを思い出した。
和樹「ああ、分かってるよ。」
杏「昨日のこと私も聞きたいわね。」
茜「私も聞きた～～～～い。」
小恋「わ・・・わたしも・・知りたいかな・・」
後ろ振り向くといつの間にか雪月花三人がいた。
和樹「雪村と花咲は分かるけど月島もか。」
小恋「う・・・だって・・・」
和樹「まぁー別にいいけどな」
渉「か～～～ず～～～き～～～」
和樹「な・・・・なんだ・・渉。」
あまりの迫力に思わずたじろぐ。
渉「説明しろ・・・昨日の事を今すぐ説明しろ！！！」
和樹の襟組を掴み和樹を揺らす。
和樹「わ・・・渉・・ちょ・・待て・・・話す・・話すから」
杉並「板橋、和樹を放してやらないと話すこともできんぞ。」

渉「わ・・・分かってるよ。」
諭されて手を放す。
和樹「今すぐじゃなくて俺の家で話していいか？」
義之「？別にいいけどなんでだ？」
和樹「まぁ～～ちょっとな。」
目線で後ろの方を促すと聞き耳をたててるクラスメートが何人かいた。
杏「なるほどねこれじゃ落ち着いて話せないものね。
私もいいわよ、今日は部活もないし。」
茜「もちろん私もオッケーーー！」
小恋「それじゃ・・・わ・・わたしも・・」
杉並「俺も問題はない」
渉「和樹もちろん、俺も行くぞ」
和樹「ああいいぜ、それじゃ話の続きは俺の家でいいな？」
和樹の提案にみんな頷く。
ちょうど朝礼が始まるチャイムが鳴りみんな自分の席に戻る。
和樹が自分の家に招待したのはちゃんと理由があった。
それは、今の現状を見てもらう方が説明しやすいからである。

第十七話　歓迎とその裏で

午前中の授業をいつも通り受け。
昼休みにベルリネッタが用意してくれた弁当を食べ。
午後の授業も滞りなく終わり。
あっという間に放課後になった。

和樹「それじゃ行くか？」
義之達「「「「「「「「「「お～～～～～！！！」」」」」」」」」」
朝の約束通り義之達を和樹の家・・・と言うか屋敷に連れて行く。
教室を出て下駄箱で靴を履き替え外に出る。
校門を抜け和樹がいつも通っている道歩く。
義之「なぁー和樹。」
和樹「どうかした？」
義之「和樹家ってこっちの方だったか？」
渉「それ俺も気になってたんだよな。」
杉並「確か、式森の住んでいる所は確か学園から歩いて五分だったはずだが」
杏「そうなの？和樹」
和樹「ま・・まぁな。」
茜「もう、十五分も歩いてるもんね。」
和樹「ちょっと色々あってな・・・・もうちょっとしたら着くから。」
それから五分後。
和樹は普段見慣れている。
屋敷の大きな門前に到着した。
渉「なぁ・・・和樹これが・・・・」
和樹「ああ今の俺の家だけど？」

義之達「「「「・・・・・・・・・・（呆然）」」」」」」
豪華絢爛な屋敷を指さす。
子供が冗談で大きな家を指さしここ俺の家っているのと同じでちょっとした洒落だと思っている。
義之達は冗談だと思ってると門がゆっくりと開く。
メイド達「「「「「「「「お帰りなさいませご主人様！！！！」
」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」
和樹「ただいまっと。」
いつも通り前に進む。
和樹「お前ら何してんだ早く来いよ。」
数歩進んで和樹は義之達が呆然としていることに気付いた。
無理もない義之達はこんな歓迎を受けたことがないのだから。

義之「あ・・あ・・今行く・・・」
和樹に促され歩き出す。
ほかの面々も義之につられて後ろについて歩く。
しばらく歩くと玄関に到着し扉が開く。
リーラ達「「「「「お帰りなさいませ！ご主人様！！（旦那様）」
」」」」」
和樹「ただいま。」
門前で和樹を出迎えたメイド達も美人だったが。
美人のレベルが違うリーラ達に思わず見とれてしまう義之達。
リーラ「和樹様、そちらの方々は？」
和樹「ああ俺の友達だ。」
リーラ「左様ですか、紹介が遅れました。
私、和樹様のメイドを束ねるメイド長をしております。
リーラ・シャルンホルストと言います。以後お見知り置きを・・」
義之達「「「「ど・・・どうも・・」」」」
綺麗な挨拶をするリーラに思わず見惚れてしまう義之達。
和樹は渉がメイド達をナンパすると思っていたのだが。

ウブな少年のように渉も見惚れてしまっていた。
リーラ「和樹様、後ほどお部屋に人数分のお菓子とお茶をお持ちいたします。」
和樹「悪い、いつも助かるよ」
リーラ「お気になさらないでください。
和樹様に尽くすのはメイドとして当然のことです。」
和樹「それでもいつもありがとな・・・さてと俺の部屋に行くか。」
義之達に目線で促し部屋に向かう。
部屋に到着すると義之達は和樹の高級感あふれる部屋を見渡し部屋に備え付けられているソファーに座る。
コンコン
リーラ「和樹様、お菓子とお茶をお持ちしました。」
和樹「お、ごくろうさん。」
カートに置いてあるお茶とお菓子を義之達の前に置く。
和樹「とりあえず茶でも飲んで一服しようか。」
杏「そ・・そうねそれじゃ遠慮することなく頂くわ。」
一斉にお茶を飲む。
小恋「お・・・おいしい」
茜「こんなおいしいお茶初めて飲んだよ。」
義之「それに少し気持ちが楽になったな。」
リーラ「ありがとうございます。皆様にリラックスして頂く為に特製のハーブティーを入れさせていただきました。
お代わりもございますから、遠慮なくお申し付けください。」
その後も、リーラが持ってきたお茶と手作りお菓子を堪能した。
和樹「さてと、そろそろ本題に入るか。」
杉並「そうだな、元々俺達は和樹に聞きたいことがあったから来たのだからな。」
渉「さてと、和樹教えてもらおうか。」
杏「どうして、メイドと一緒に暮らしているのかをね。」
和樹は義之達にずべて話した。

偶然にも福引で島に行くことになった事。
あの島で起こった事。
あの老人に頼まれたこと。
水銀旅団との戦いの事を全て話した。
正し、リーラ達の思いは言っていない。
義之達は信じられないという顔をしながら和樹の話を聞いていたが。
和樹が真剣に義之達に説明していたので信じるしかなかった。
全てを話し終えた後、時計を見ると夜の七時になっていたので義之達を夕食に招待した。
一流レストラン・・・
いやそれ以上の料理を作るメイド達の絶品料理を食べながら談笑した。
楽しい時間というものすぐに来るもので、外もすっかり暗くなっていた。
夜道は危ないので、メイドの運転する車に義之達を乗せ送らせた。
車が見えなくなると。
リーラ「和樹様」
和樹「ん？どうした？」
リーラ「いいご学友をお持ちですね。」
和樹「そうだな・・・俺の自慢の友達だな。」
こうして、和樹の楽しい時間は終わった。

一方その頃・・・・・
ここは初音島の港にある巨大倉庫。
この中に二人の男がいた。
？？？「あれの準備はどうなっていますか？」
？？？「こっちは順調ですそちらは？」
？？？「私の方も大丈夫です。後は起動を行うだけです。」
？？？「そうですか・・・それでは遂に・・」

???「はいこれで、これらを使えば私達の復讐が始められます。」
???「そう！式森和樹を殺すという復讐が！！」
二人の視線の先には三つの巨大な円筒と巨大な魔法陣があった。
いずれもなかにはメイドがいた。
ただし人間ではないような雰囲気があった。
青色に禍々しく発行している
円筒の方にはメイドの背中には何本ものチューブが繋がれていた。
そして、魔法陣の中のメイドは体に鎖が巻きつけられていて少し体が透けていた。
この謎の男二人がこれから何を起こすのかそれはまだ誰にも分からない。

第十七話　歓迎とその裏で（後書き）

これで初音島編終わりです。次話から新章開始です。
そして、某アニメ・某本からあの冥土が登場します。
それでは、また次回お会いしましょう。

第十八話　悪霊と冥土（前書き）

今日から新章天空の執行者編が始まります。
そして、新しい冥土（メイド）が登場します。

第十八話　悪霊と冥土

今日の和樹はエスカレードに起こされ、
メイドが用意した弁当（今回はシェルビーが当番）の弁当を受け取り、
メイド達に見送られ登校していた。
和樹「今日もいい天気だな・・・桜も綺麗に咲いているし平和そのもの・・
じゃないよな・・・・」
妙な気配を感じたので戦闘態勢に入る。
まわりを警戒していると・・・
???「シャァァァァァァ!!」
普通の人間には見えない亡霊が和樹の左右後ろ更に上からも襲いかかる。
和樹「やれやれ、またか・・・・」
特に動じた様子もなく和樹は・・・・
和樹「消えな・・・」
両手に軽く気を込めると両手が青く光り出す。
バキ!バキ!バキ!バキ!バキ!
襲いかかってきた亡霊を全て殴り飛ばして消滅させた。
和樹「二日続けてか・・ま・いいかちょうどいい退屈しのぎになってるしな。
やべっ!早くいかないと遅刻しちまう。」
敵がいなくなったことを確認し、いないことが分かると力を抑えた。
一昨日から和樹は妙な亡霊に襲われるということがおきている。
しかし、和樹はそのすべてをあっけなく倒している。
和樹はこのことをリーラに話していない。
この程度の事は言う必要がないと思っていた。

和樹が亡霊を殴り飛ばした光景を離れた桜の木の上で和樹を見ているメイドがいた。
???「やはりあの程度の低級霊では歯が立ちませんか。」
???「アイリ、聞こえるか。」
アイリと呼ばれたメイドの耳に付けているインカムから声がした。
アイリ「なんですか？」
???「首尾はどうだ。」
アイリ「今日も失敗ですわ。」
???「そうか、やはり自分達で仕掛けるしかないようだな。」
アイリ「・・・・そうですわね」
???「？どうかしたか？」
アイリ「いえ何でもありませんわ」
???「だから、あたしが言った通り最初から回りくどい事なんかせずにあたしたちで殺ればよかったんだよ。」
インカムから聞こえてくる声が刺のある声主にかわる。
アイリ「エクセル・・・」
エクセル「アイリには悪いけどあたしはさっさとこの任務終わらせたいんだよね～～。」
???「エクセル・・・黙れ」
???「わかったよ・・・パンデーラねぇ～～～
・・・そんなに怒んなくてもいいじゃん・・・」
謎のメイド、パンデーラに諭されて大人しくなる。
???「アイリ、聞こえますか？」
アイリ「その声は、エリートですか？」
エリート「先程はすいません妹が余計な事・・・・」
アイリ「いえ特に気にしていません」
エクセル「ブーーーーエリートねぇ～～～までそんなこと言う～～～」
インカム越しにエクセルが不貞腐れた声がするがそれを無視して話

を進める。
エリート「話を戻しますが、
エクセルの言うとおり今日仕掛けてみようと思います。」
アイリ「今日・・・ですか」
エリート「はい・・・アイリには引き続き式森和樹の監視をお願いします。
準備が完了したら、私達はアイリと合流します。仕掛けるのは・・・・」
アイリ「あなた達と合流したときですか・・・」
エリート「はい」
アイリ「分りましたわ、それではまた後ほど」
話が終わったところでインカムでの会話が終了した。
アイリ「なんですの・・・この感じは・・・あの男・・・
いえあの方を見ていると何だか胸が・・・熱いですわ。」
アイリはある男たちに和樹の殺害を命令された。
初めて顔を見たのは写真だった、その時は何も感じなかった。
しかし、一昨日に和樹の顔を生で見た時なぜか胸が熱くなった。
最初は低級霊で攻めた後、直接アイリが和樹に攻撃を仕掛けようと考えていたアイリだったが・・・できなかった、心の奥の何かが攻撃を躊躇させていた。しかし・・・
アイリ「式森和樹を殺さなければ私は・・・私は・・・・」
悲痛な声を残すとその場から消えた。

第十九話　迷いある襲撃者

朝から亡霊に襲われるという妙な経験をした和樹だが、どうにか遅刻をせずに学校に到着することができた。
その後は、これといった事もなくいつも通りだったが、昼休みに入る前・・・
四限目の授業であることに気付いた。
和樹「（俺を見ている視線が増えているな・・・気配は一つ・・・だけど、複数の視線を感じる・・・どういうことだ？）」
一昨日から和樹は誰からの視線を感じていた。
特に害もないようなので放っておいたが、
視線が増えていることに違和感を覚えていた。
そんな事を考えていると授業終了のチャイムが鳴り昼休みに入った。
妙な視線を感じつつ和樹は義之達と一緒に食事を摂った。
昼休みが終わった後も、妙な視線を感じていたが、
特に気にすることもなくいつも通り授業を受けた。
そして、授業が終わりホームルームが終了し下校となった。
渉「和樹、今日和樹の家に行ってもいいか？」
和樹「ああ・・・悪い今日はだめだわ・・・・」
渉「え～～～～何かあんのかよ？」
和樹「まぁーーーちょっとな・・・所で渉お前部活は？」
渉「今日は、部の女の子のほとんどが体調を崩してな・・・それで今日休みなんだわ。」
和樹「またかよ・・・此処んとこ毎日だな。」
亡霊の襲撃、妙な視線だけではなく、
学校の女の子が突然体調を崩すということが一昨日から起きていた。
和樹「それじゃ俺は帰るわ。」
渉「おうそれじゃーーーな。」
教室を後にして、下に向かうのではなく。

上に向かっていた。

学校の最上階、つまり屋上に出ると屋上の扉に鍵をかけた。
和樹「さてと・・・いるのは分かっているんだ出てきたらどうだ？」
和樹の前後左右に取り囲まれる形で四人のメイドが突如現れた。
和樹「お前ら一体何者だ？」
アイリ「わたくしは、冥土へ誘うものアイリ」
パンテーラ「バトルメイド、パンテーラ」
エリート「同じく、エリート」
エクセル「エクセルだよ、よろしくね、でもすぐにサヨナラだけど。」
和樹「お前らの目的はなんだ？
まぁ・・・・聞かなくても検討はつくけど。」
アイリ「あなたに恨みはありませんが・・・・」
パンテーラ「クリエイターの指令に従い・・・・」
エリート「式森和樹あなたを・・・・」
エクセル「殺さないといけないだよねっ！！！」
アイリは鎌を構え・・
パンテーラは二丁のライフル別名デュアル・ファングを展開。
エリートは状況に応じて武器を変形させる武器トライエッジを槍に
エクセルもエリート同じ武器トライエッジを二丁の銃に変形させる。
武器を構えた四人は攻撃を仕掛ける。
パンテーラが和樹に二丁銃を撃つが楽々と避けられる。
そこに鎌を携えていたアイリが和樹に襲い掛かる鎌の乱舞が和樹に
襲い掛かるが。
すべて、あっさりかわされてしまう。
そこへ今度はエリートとエクセルの二人が襲いかかる。
エリートは槍を縦横無尽に振り。
エクセルは二丁銃を味方に当たらないよう和樹だけを狙うが・・・・

・
四人の攻撃は全然当たらないそれどころかかすりもしない。
アイリ「避けてばっかりいないで反撃したらどうですか！！！」
エクセル「あんた、少しはやる気を出してよね！！」
和樹「やる気を出せか・・・俺に言わせればお前ら
相手にやる気を出す理由がないだよ。」
パンテーラ「どういう事だ。」
エリート「それは、私達如きでは相手にならないということでしょうか・・・」
和樹「はぁ～～～そうじゃないって・・・・
俺が言いたいのはお前達と闘う理由がないって事だよ。」
エクセル「闘う理由？」
和樹「さっきそこの・・・パンテーラだったかな？
が言ったよな『クリエイターの指令に従い・・』って。」
パンテーラ「それがなにか・・・」
和樹「ということはお前ら誰かに命令されてるんだろ？」
アイリ「その通りですわ。」
和樹「お前等は別に俺に恨みがあるってわけじゃないんだよな。」
エリート「あなたを知ったのは一昨日の事。
恨みようがありません。」
和樹「もし、お前等が俺に恨みがあって戦いを仕掛けているのなら
反撃するが
お前等の意志で、自分たちの意思で戦っていない奴とは戦えない。
それに・・・・」
エクセル「それに？」
和樹「お前達からの攻撃には殺意がないんだよ。」
アイリ達「「「「「！！！！！！？？？？？」」」」」
和樹の言う通りアイリ達は和樹を殺すことに躊躇いがあった。
アイリは、和樹を監視していたときから躊躇いがあった、パンテーラ達がアイリと合流して、初めて肉眼で和樹を見た時、本当にこの

男を殺していいのかと思っていた。
和樹「殺意がない攻撃なんて何回仕掛けてきても俺には当たらない。」
アイリ「それでも・・・・」
小声でポツリと言い。
アイリの肩が震える。それは怒りによるものか・・それとも・・・
アイリ「それでも私くしはあなたを殺さないといけないです！！！
そうしないといとわたしは・・・わたしは・・・わたしは！！！！！！！」
悲鳴にも近い声をあげると真正面から和樹に突撃を仕掛けてきた。
それに合わせて三人も和樹に突撃する。
対する和樹は両手を広げていた。
まるで、好きにしろと言わんばかりに・・・・・・・
四人の同時攻撃が和樹に襲いかるが・・・・・・
和樹「どうした？・・・・殺るなら今がチャンスだぜ。」
後、数センチで届く所で四人の武器が止まり攻撃が止まっていた。
エリート「なぜ・・・・・」
和樹「ん？」
エリート「なぜ避けようともしなんですか！！死ぬつもりですか！！！！」
和樹「言ったろ殺意がないって。
それに、ハナから止めるのは分かっていたしな・・・・
で、どうするまだ戦うのか？これ以上戦ってもしょうがないと思うぞ。」
パンテーラ「・・・・撤退する・・・・」
三人「「「パンテーラ（ねぇぇ）（姉様）！！！？？？」
パンテーラ「式森和樹の言うとおりこれ以上戦っても無駄だ。
だから、ここは体勢を立て直す」
それだけいうと、ものすごい高さでジャンプし体育館の屋根上まで跳び。

屋根と言う屋根の上を飛びながら去っていく。
エクセル「今日はこの辺で勘弁してあげるけど！」
エリート「次に会うときはその首をいただきます、それでは」
エクセル・エリートの二人もパンテーラと同じようにその場を後にする。
アイリ「本日はこれで、失礼させていただきます。
それでは御機嫌よう・・・・」
アイリはパンテーラ達とは違い空を飛んでそその場から去って行った。
まるで、霊が飛び去っていくかのように・・・・
和樹「あいつらやっぱり人間じゃなかったな。
パンテーラとエリートとエクセルだったか、
あの三人たぶん、噂に聞いていたＢＭＲ通称バトルメイドロボだろうな、
しかも戦闘用の。
そして、あのアイリっていうメイド恐らくありゃぁ死霊（レイス）だな。
あ、もしかして最近の女子の体調が突然崩れている
原因ってまさかあいつが女子の精気を吸っているからか、
たしか、死霊って人の精気を吸うってさくらさん言ってたな。
はぁーーー死霊にバトルメイドロボか・・・・」
和樹が状況を整理していると・・・・・
いろは「旦那様！！！」
シェルビー「ご主人様！！！！
和樹の後ろにいろはとシェルビーがいた。
実はこの二人、先程の戦闘を遠くからずっと見ていた。
和樹に迷惑がかからないように護衛するのも実は当番制で、二人一組で行っている。
今日は、いろはとシェルビーが当番だ。
最初は加勢しようとしたが、和樹が二人に気付き視線で。
和樹「お前等は手を出すなよ」

と伝えた。戦闘が終わると二人はすぐに和樹のもとに駆けつけた。
和樹「おっ・・お前等どうした？」
いろは「どうしたじゃありませんよ！旦那様！！」
シェルビー「ご主人様、怪我はありませんか！！」
和樹「みたとおり。」
和樹に怪我がないのを見てホッとする二人。
和樹「お前等に頼みたいことがあるんだけどいいか？」
いろは「？なんでしょうか？」
和樹「リーラに俺の携帯を届けてくれないか」
シェルビー「それは構いませんけど。」
いろは「携帯ですか？」
キョトンとした顔になる。
ポケットに手を入れ携帯を出し操作すると地図が出てきて、赤い点滅が一つ動いていた。
それを二人に見せる。
シェルビー「ご主人様これは・・・」
和樹「さっきの戦いのときに、リーラから渡された発信機をアイリとかいうメイドの首筋の後ろに付けといたんだよ」
いろは「発信機・・旦那様いつの間に・・・」
シェルビー「さすが、あたしのご主人様・・・・・」
和樹の早業に感嘆する二人。
和樹「二人はこの携帯をリーラに渡してくれ。
俺は一足先に黒幕の所に行く」
いろは・シェルビー「「旦那様（ご主人様）！！！」」
和樹「心配するなってあいつの気配をたどって行くから場所は・・・・」
シェルビー「そういうことじゃないです！！！」
いろは「旦那様にそんな危険なことをさせるわけにはいきません！！！」
和樹の提案に怒る。

和樹「大丈夫だって、俺を信じてくれよ」
シェルビー「ご主人様のことは信じていますが・・・・」
和樹「頼む、俺を信じてくれ」
いろはとシェルビーの眼をじっと見る。
シェルビー「わかりました・・・」
いろは「シェルビーさん！！！？？？」
折れたシェルビーに驚きの声を上げる。
シェルビー「大丈夫だって、ご主人様。滅茶苦茶強いんだから。」
いろは「ですが・・・・」
シェルビー「それに・・・」
いろは「それに？」
シェルビー「ご主人様にご奉仕し守ることも大切だけど
ご主人様を信じることもメイドとして大切だと思うの、
だからあたしは、ご主人様を信じる」
和樹「ありがとな、いろは俺はなお前等が俺を信じてくれるなら俺
は負けない。」
和樹とシェルビーの言葉に考えるいろは。
いろは「わかりました。私も旦那様にお仕えするものとして旦那様
を信じます。
ですが、一つだけ約束してください。無茶はしないと。」
和樹「分かった、約束する。」
和樹の言葉に納得した二人は和樹に一礼しその場を去った。
二人が去ったのを確認すると手を握り力を込め
手を開くと緑色の雷を纏った蒼い勾玉が出てきた。
和樹「もしかしたら、久しぶりにあれを使うかもしれないな。」
それだけ言うと、勾玉を消し鍵をかけていた屋上の扉を開けその場
を後にする。
和樹の命を狙う黒幕は誰なのだろうか、

第二十話　影の将の正体（前書き）

今回はちょっとだけ暴力的な表現があります

第二十話　影の将の正体

和樹達が行動を開始している時、パンテーラ達は和樹を殺すように命令した黒幕がいる場所に向かっていた。
そして夜中に初音島の港にある倉庫に到着していた。
パンテーラ達は黒幕に言った。任務失敗と・・・・・
その報告を聞いた黒幕は憤慨しパンテーラ達の手足を鎖で拘束した。
???「この無能が!!!!!」
黒幕の一人・・・・
白いスーツにネクタイいかにも研究者と言う感じの男が怒りを表にしていた。
服装から分かるようにこの男がパンテーラ・エクセル・エリートの関係者である。
この男が働いている研究施設がバトルメイドロボを開発している研究施設で
そこから、バトルメイドの中でも最高出力を誇る。
パンテーラ・　エクセル・エリートの三人をもう一人の黒幕の命令でばれないように研究施設から持ち出した。
???「命令されたこともこなせないのか!!屑鉄に屑死霊が!!!!」
パンテーラ達を罵倒すると、右手に握られているリモコンのボタンを押す。
パンテーラ達「「「「「「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!

してこい！！！」
同じ内容で再び命令するが・・・・・
パンテーラ達「「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」」
黒幕に対して、答えない。
？？？「お前ら聞いているのか！！！！」
パンテーラ「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」
再び無視する四人、それに業を煮やし。
？？？「こいつら！！！」
また、電流が流れるスイッチを押そうとするが。
？？？「おやめなさい。ニース」
もう一人の黒幕が制する。
？？？「カーボン卿！しかし！！」
そう、黒幕のうちに一人の正体は和樹がメイド達と出会った島で水銀旅団の司令官カーボン卿だった。そして、もう一人はカーボン卿の側近で科学者でもあるニースと言い白髪に口ひげを生やした男だ。
カーボン「私達は紳士です、そのような乱暴な事をしてはいけません。」
ニース「しかし・・・・・・」
カーボン「ここはスマートに彼女たちの人格を消しあれを使えばいいのです。」
パンテーラ達「「「「「！！！！！！！！？？？？？？？？？」」」」」
驚愕した顔になる。
ニース「なるほど・・・確かにあれなら確実に・・わかりましたすぐに準備します」
それだけ言うと、カーボンにリモコンを渡し近くにあるパソコンをいじり始める
アイリ「待ってください！！！」
カーボン「なんですか？」
アイリ「それだけはやめてください！！」
エリート「もう一度私達にチャンスを！！！」

エクセル「だから！！！！」
パンテーラ「あれを使うのは！！それだけは！！！！」
恐れるように必死訴えかける。
カーボン「あなた達の言い分は分ります。」
やめるかもしれない言葉に少しだけホッとするが。
カーボン「ですけどね・・・・お前ら如きが人間様に意見してんじゃねぇよ！！！！！！！！」
先程の紳士ぶりが嘘の様になくなりニースから渡されていたリモコンのボタンを押し電流を流す。
パンテーラ達「「「「きゃぁぁぁ

パンテーラ達（アイリを除く）「「「アイリ！！！！！！！！！！！！！！！」」」
カーボン「どうだ！！痛いか？苦しいか！！！なら式森和樹を殺してこい！！！！
アイリ「そ・・・それは・・で・・・できません・・・・」
カーボン「できないだと！！
たかが召喚されるだけの存在がこの私に楯突くか！！！！！」
アイリを拘束している蔓の力がさらに強くなる。
アイリ「あああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！

」
一方、パンテーラ達も・・・・・
パンテーラ「（このまま行けば私たち姉妹は確実に破壊されるな・・・・
だが、それも悪くない式森和樹を殺すよりはよほど・・・・・
？？？？なぜ私は・・・こんなことを・・・・・・）」
エリート「（このままでは破壊させると言うのにどうして私は・・・・
式森和樹の事を考えているのでしょうか・・・・彼が憎いからでしょうか・・・
いえ・・何か違います・・・彼の事を考えると胸が熱くなってしまいます。
まさか・・・・・これは・・・・・）」
エクセル「（はぁーーーー稼働してすぐに廃棄か・・・・・・
もし生まれ変わることが出来たらパンテーラねぇ達とアイリと一緒に居たいな。
それで、あたし等、人間だったらいいな。
そんでもって式森和樹のメイドに・・・・・っあれ？
どうしてあたしあの人間のことを・・・・これってなに・・・・・）」
四人は死の間際に共通の事を思っていた。
すると、一陣の風が吹きパンテーラ達を拘束している鉄の鎖と蔓が切断され
パンテーラ達は受けたダメージの影響でその場に倒れ風が吹いた方を見る。
カーボン「な・・何事だ！！！！！！」
風が吹いた方向。倉庫の扉を見ると・・・・・
？？？「倉庫の貸出料金を貰いに来ました～～～」
今は、夜しかも雲が空を覆っていてカーボンのいる立ち位置では乱入者の顔が見えない。
しかし、聞いたことある声に警戒する。

カーボン「何の様だ！貴様は！！！！」
？？？「だから、貸出料金を頂きに来たって言ってるだろ・・・だけど・・・・」
空を覆っていた雲が少しずつ消え月明かりで乱入者の顔が少しずつ見えていく。
和樹「料金はお前等の命だけどな。」
カーボン「お前は！！！！！」
扉の内側に立っている乱入者は風見学園の制服を着ていて腰に差している刀を抜き肩に置いている式森和樹だった。

第二十一話　セラフィックフォーム

カーボンとニースは和樹の乱入に驚いていたが。
倒れているパンテーラ達はカーボンたち以上に驚いていた。
先程まで和樹のことを思っていたらその和樹が自分達を助けた。
自分達は和樹を殺そうとしたのに和樹が助けてくれた。
そのことに驚いていたがそれ以上にパンテーラ達は・・・
堪らなく嬉しかった。
アイリの眼からゆっくりと涙が・・・・
そして、意外なことに機械である
パンテーラ・エクセル・エリートの眼にも涙が出ていた。
四人が感傷に浸っていると・・・・・
カーボン「貴様どうやってここに！！！」
ゲスな場違いの声が響く。
和樹「アイリの気配とアイリの首筋に付けた発信機でここに来たんだよ。」
アイリ「！！？？い・・・何時の間に・・・・」
カーボン「発信機だと！！この役立たずが！！
蔓嵐（ヴィート・ヴェント）！！！！！」
アイリの失敗に腹を立て再び木の蔓でアイリを拘束しようとするがまた、一陣の風が吹きアイリに到達する前に蔓を切断した。
和樹「おい・・・俺を無視するなよ、カーバカお前の目的は俺だろうが。」
和樹が風の斬撃をおこし蔓を両断する。
カーボン「誰がカーバカだ！！カーボンだ私は！！！！」
和樹「そうだっけ・・・まぁーーーそんなのはどうでもいいや
それよりお前ら逃げようとしても無駄だぞ」
カーボン「何？」
和樹「この倉庫はすでにリーラ率いるメイド部隊がすでに包囲して

いる。
蟻の隙間もないほどにな。」
和樹の後ろ正確には扉の外側にリーラ・ベルリネッタ・シェルビー・エスカレード
・エリーゼ・いろはの6人が各々の武器を持っていた。
和樹「さぁ・・・どうする？」
カーボン「クックックッ・・・・」
いきなり不気味に笑うカーボンにかなり引く和樹。
カーボン「そのセリフ・・・そっくりそのままそちらに返そう！！
ニース！！！！」
ニース「了解しました！！」
パソコンの机の下にある隠しスイッチを押す。
すると、倉庫の壁周りだけではなく開けっ放ししていた扉と空間ができている所に電気の壁が現れるに電流が流れ倉庫を囲い倉庫の内側と外側を完全に遮断される。
和樹「こいつは・・・・」
リーラ「和樹様！！」
倉庫の外側にいるリーラが和樹の元へ向かうが。
バチッ！！！
リーラ「くっ！！！これは・・・」
電気の壁に阻まれてしまう。
エスカレード「リーラ様！離れてください！！！」
リーラが離れるとハンドガンを使う。
バン！バン！バン！バン！バン！
しかし、放った弾丸は全て電気の壁に阻まれてしまう。
エスカレード「そんな・・私の銃が効いてない。」
ベルリッネタ「でしたら今度は」
シェルビー「あたし達で」
エリーゼ「壊します！！！」
いろは「いざ参ります！！！！」

ベルリネッタ・シェルビー・エリーゼ・いろはの近接戦闘が得意な
四人が行く。
四人「「「「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

セラフィックフォーム起動と出る。
そして、カーボン卿の足下にある無数のパイプがパンテーラ達を覆う。
パンテーラ「い・・・いや・・・」
エリート「や・・・やめ・・てく・・だ・・さ・・・い」
アイリ「し・・・し・・・きもり・・か・・ず・・き・・・」
エクセル「に・・・に・・げて・・・」
和樹「お・・おい！お前等！！！・・・くそ！！！」
パンテーラ達を助けるために覆っているパイプに
刀で斬撃を飛ばし攻撃するが・・・
ガキン！ガキン！ガキン！！
和樹「か・・・固え！」
和樹は再び攻撃を繰り返すしかし、全く効果がない。
パイプはパンテーラを拘束し。
エリート・エクセルの二人はパイプに包まれていく。
そして、アイリは・・・・
カーボン「さよならアイリ・・・吸収（デイクオーバー）！！！！！」
アイリ「いや・・いや・・・や・・め・・・て・・・」
泣くアイリを無視し呪文を発動させる
パイプで覆われているアイリの周りを更に魔法陣が包み込む
そして、魔法陣が消え覆われているパイプがなくなるとそこには光の玉が浮かんでいた。
エリート・エクセルの二人を覆っているパイプが徐々に小さくなっていく。
すると、エリート・エクセルの二人を覆っているパイプが野球のボールぐらいの二つの鉄の玉になるのを見た和樹は攻撃をやめた。
和樹「なんだ、あれは・・・」
その光景に驚く。
光の玉と二つの鉄の玉がパンテーラの体内に入っていき
漆黒の風がパンテーラを包む。

和樹「一体何が起きてるんだ」
黒い風が吹きやむとそこには、背中に機械の翼を生やした無表情のメイドがいた。
パンテーラ「セラフィックフォーム起動を確認。全リミッター解除。目の前の男を目標と推定。目標を駆逐する。」
魔術と科学が融合した最狂最悪の冥土が誕生した。
この最悪の相手に和樹はどうするのか。

第二十一話　セラフィックフォーム（後書き）

次回から和樹がマジで闘います

第二十二話　雷獣騎士ＶＳ天空の執行者（前書き）

今回は和樹が新の力を発揮します。
はっきり言って滅茶苦茶強いです！
もう最強！

第二十二話　雷獣騎士ＶＳ天空の執行者

カーボン「覚悟しろよ式森和樹、こいつが貴様を殺す死刑執行冥土だ。」
パンテーラ「・・・・・・・・」
無表情にして無機質の表情で和樹を見る。
和樹「やるしかないようだな。」
リーラ「和樹様！！」
後ろから心配そうな声をリーラが上げたので後ろを振り向く。
和樹「大丈夫・・心配すんな。」
振り向くとリーラ達は心配と不安が入り乱れた顔をしていたので
リーラ達を安心させるため笑顔で冷静な声で答える。
ベルリネッタ「し・・しかし・ご主人様！」
ニース「ずいぶん余裕だな！その余裕今すぐ絶望に変えてやる！！
行け！パンテーラ！！式森和樹を殺すのだ！！！」
パンテーラ「命令確認・・・・目標の排除開始。」
それだけ言うと一瞬で和樹の間合いに入る。
和樹「は・・・速い！？」
完全に見えなかった動きに驚く。
そんな和樹に容赦ないパンテーラの右拳が和樹の腹に炸裂する。
和樹「危ない危ない・・・」
腹に当たる直前に左手で攻撃を止める。
その時和樹はある異変に気付いた。
和樹「！？なんだ・・・体が動かない」
体の回りを見てみると・・・・
和樹「これは・・・アイリの低級霊召喚か！！いつの間に！！」
和樹の両手足をしっかりと握っている亡霊がいた。
倒すのは簡単だが一度拘束されるとなかなか抜け出せない。
動けない和樹にパンテーラは和樹を蹴り上げる。

和樹「くっ・・・」
腹に直撃し和樹は勢いよく倉庫の天井を突き抜けそのまま飛ばされる。
どうやら上には電気の壁はないようだ。
そこへ、高速移動で先回りしたパンテーラが空で待ち構えていてがら空きになっている
和樹の背中にパンテーラの右ストレートが炸裂する。
そして今度は勢いよく下降し、和樹が先程いた所に落下。
クレータのような穴ができる。
和樹の真上にいるパンテーラは融合した事によってパワーアップした二丁銃デュアル・ファングを呼び出し両手に持つ。
そして、和樹に狙いを定める。
パンテーラ「排除開始」
和樹めがけ銃口が火を噴く。
しかし、銃口から出ているのは鉛の玉ではなくエネルギーの弾だった。
エネルギーの弾丸の雨が無慈悲にも和樹に襲いかかる。
リーラ達「「「「「「ご主人様（旦那様）！！！！！！」」」」」」
リーラ達の悲痛な声が響く。
そして、しばらくするとエネルギーの弾丸の雨が止む。
砂塵がまい何も見えない。
カーボン「やったか！！」
ニーズ「あれだけの攻撃です・・おそらくは」
自分達の勝利を確信しているカーボンたち
しかし、砂塵の中に薄らだが人影が見える。
和樹「く・・・なかなか・・やるな」
そこには頭から血を流して制服がボロボロになっている和樹が立っていた。
カーボン「なっ！！？？あれだけの攻撃を受けて無事だと！！！
ちっ！！パンテーラやれ！！」

命令を下すが・・・
パンテーラ「・・・・・・・・・・」
上空で浮かんだまま動かない。
カーボン「何をしているさっさといけ！！！」
カーボンとニースの視力では上空にいるパンテーラの姿がぼんやりと見える。
しかし、和樹は眼がいいのでパンテーラの顔まではっきり見える。
和樹「あいつ・・・泣いてやがる。」
薄らと右目から涙が流れていることに気づく。
パンテーラ「・・・・・・・」
口パクで和樹に何かを伝える。
和樹「！！？？」
和樹はパンテーラの口パクの内容に・・・・
和樹「私を殺して下さいだと・・・ふざけるな・・ふざけるな！！！」
真意がわかり激怒する。
始めてみる和樹の憤怒に驚くリーラ達。
和樹「やっぱり使うか・・・雷狼竜（ジンオウガ）を」
そして和樹は左手に力を込め緑色の雷を纏った蒼い勾玉を出しそれを握り潰す。すると和樹の回りを緑色の雷が覆う。
リーラ「和樹様！！一体何を！！」
いろは「旦那様！！」
目の前で起きていることに和樹以外の全員が驚いていると和樹を覆っていた
緑色の雷が消えそこには鎧をまとった騎士がいた。
蒼色の鎧に緑色の雷を纏っていて腰に差していた刀がなくなり背中には長い太刀を背負っている。
和樹「またせたな」
カーボン「き・・貴様・・その姿は一体・・・・」
和樹「これか・・・俺が昔じいちゃんから教わった技

鎧獣闘法(がいじゅうとうほう)の一つ。雷狼竜(ジンオウガ)だ！！」
鎧獣闘法、それは鎧獣(がいじゅう)と呼ばれ心の中にいる守護獣のようなもの
人によっては姿も能力もバラバラ
その鎧獣を鎧として召喚し装着することで自身の力を何倍にも増幅させる技。
普段は和樹の体内に入っており、和樹が力を込め鎧獣が入っている
勾玉を召還し破壊することで力が解放され和樹の力となり鎧となる。
この技は誰でも使えるわけではなく守護霊が入っている
確率は十兆人に一人の確率で中々いない。和樹の祖父はこの技が使え、
幼い和樹にも才能があると思い鎧獣闘法を教えた。
そして、和樹は超特異体質で鎧獣は通常一人一体なのだが、
和樹は体内に三体もの鎧獣を宿している。
シェルビー「ジン・・・・」
エスカレード「オウガ・・」
エリーゼ「あれがご主人様の本気のお姿」
始めてみる和樹の本当の力に驚く。
ニース「損なものは唯のハッタリだ！！
パンテーラ！！式森和樹を殺せ！！！！」
パンテーラの眼から涙が消え再び無表情になる。
パンテーラ「排除開始。」
二丁の銃を下に向け。
先程和樹に放ったエネルギーの銃弾の雨を再び放つ。
しかも、さっき撃った時とは違い弾数が多い
カーボン「そんな鎧を纏おうともこのパンテーラの前では無意味だ！！」
和樹「そいつはどうかな」
上空から迫る銃弾の雨に和樹は右腕に力を込める。
すると、蒼色の雷が和樹の右腕を覆う。
そして、和樹は蒼い雷を纏った右腕を前に向け右腕の手を開き・・・

・
ギリギリの所ですべての弾丸を右手だけで周囲に叩き落とした。
ニース「なっ！！？？ば・・・馬鹿な！！！」
和樹「どうしたこんなもんじゃ俺を殺すことは不可能だぞ。」
カーボン「この小僧が！！パンテーラ！！お前の真の力を見せてやれ！！！」
パンテーラ「了解しました。」
両手に持っている銃を合体させ一つの巨大な銃にする。
これこそ、デュアル・ファングの真の姿。
デュアル・ファングを下にいる和樹に向ける。
パンテーラ「充填開始」
銃口にどんどんエネルギーが集中していく。
和樹「なら俺は正面から切り裂く！この王牙刀でな！！」
背中に背負っていた鞘から太刀を抜き上段に構える
倉庫を覆っている電気の壁の電気が剣に集まり緑色に光る。
まるで力を貯めているかのように・・・・
パンテーラ「充填完了・・デス・ソウルパニッシャー！！」
銃口から巨大なエネルギーの弾丸が発射される。
和樹「閃輝雷翔（せんきらいしょう）！！！！」
上段に構えていた太刀を一気に振り下ろすと
緑色の雷を纏った斬撃がエネルギーの塊に向かって行く。
パンテーラ「！！？？」
和樹の斬撃がエネルギーで出来た巨大な弾丸を切り裂き
パンテーラに向かっていく。
この攻撃で和樹は勝つことができるのか。
そしてパンテーラ達はどうなるのか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9371t/

まぶらほ　最強にして最高のメイドの主人

2011年12月11日00時49分発行